

# **伊勢遺跡確認調査報告書Ⅷ**

## **守山市文化財調査報告書**

**平成25（2013）年3月**

**滋賀県守山市教育委員会**

## 序 文

滋賀県の南部地域に所在する守山市は、京阪神のベッドタウンとして発展してきました。守山市は全国的にも、住みよさランキングで湖南地域の市町とともに上位にあり、人口の増加が続いています。宅地造成やマンション等の建設、道路や教育施設など公共施設の整備など、各種の開発によって「のどかな田園都市 守山」の景観が大きく変化しています。このような開発に伴う発掘調査によって、地下に埋もれていた貴重な文化財が発見され、私達祖先の足跡が明らかになってきました。

伊勢遺跡は、このような開発の進展の中で発見された弥生時代の遺跡です。調査が進むにしたがって、ムラからクニへ発展する様子がわかる貴重な遺跡であることが明確となりました。伊勢遺跡は我が国の形成過程を考えるうえで、欠く事のできない重要な遺跡であることから、平成24年1月に国史跡に指定されました。今後、十分に検討を重ね、伊勢遺跡の保存と活用を図ってまいります。

伊勢遺跡は国の成立を探る重要な遺跡と考えられることから、守山市ではその保存を図るため確認調査を実施してきました。本書は伊勢遺跡の重要性を物語る確認調査の成果についてまとめたものです。

最後になりましたが、伊勢遺跡の調査に携わって頂いた方々、協力いただいた皆様方にお礼申し上げるとともに、今後とも本市の文化財保護行政に御理解賜りますようお願いいたします。

平成25年3月

守山市教育委員会  
教育長 上路 博

# 例 言

1. 本書は、平成19年度から平成21年度にかけて実施した伊勢遺跡の範囲確認調査成果の概要報告書である。調査は国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。整理業務は平成24年度国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。
2. 本調査は、守山市伊勢町字北東浦56-2番他の水田地で行った。
3. 本調査は、守山市教育委員会が実施した。
4. 調査整理業務は平成24年4月1日より平成25年3月31日まで実施した。
5. 整理調査業務にかかる教育委員会事務局は以下の体制で実施した。

## 平成24年度整理調査

教育長 上路 博 教育部長 古高 弘士 教育次長 北野 正広  
文化財保護課長 岩崎 茂 調査担当者 伴野 幸一

6. 本確認調査・整理業務及び本報告書作成については伴野が担当した。
7. 本報告書では標高は東京湾ポイントを使用し、北方位は日本平面国家座標六系のX座標を用い磁北を併記している。
8. 本調査にかかる遺物・図面・写真資料は、市立埋蔵文化財センターに保管している。

## 伊勢遺跡確認調査調査報告Ⅷ

|         |   |
|---------|---|
| 序       | 文 |
| 例       | 言 |
| 目       | 次 |
| 挿 図 目 次 |   |
| 図 版 目 次 |   |

|     |                      |    |
|-----|----------------------|----|
| 第1章 | 確認調査に至る経緯と伊勢遺跡の歴史的環境 | 1  |
| 第1節 | 確認調査に至る経緯            | 1  |
| 第2節 | 伊勢遺跡の地理的環境           | 3  |
| 第3節 | 伊勢遺跡の歴史的環境           | 5  |
| 第2章 | 伊勢遺跡106次調査           | 7  |
| 第1節 | 調査の経緯                | 7  |
| 第2節 | 検出した遺構               | 7  |
| 第3節 | まとめ                  | 8  |
| 第3章 | 伊勢遺跡107次調査           | 9  |
| 第1節 | 調査の経緯                | 9  |
| 第2節 | 検出した遺構               | 10 |
| 第3節 | 出土遺物                 | 13 |
| 第4節 | まとめ                  | 15 |
| 第4章 | 伊勢遺跡108次調査           | 16 |
| 第1節 | 調査の経緯                | 16 |
| 第2節 | 検出した遺構               | 16 |
| 第3節 | 出土遺物                 | 16 |
| 第4節 | まとめ                  | 16 |
| 第5章 | 伊勢遺跡109次調査           | 18 |
| 第1節 | 調査の経緯                | 18 |
| 第2節 | 検出した遺構               | 19 |
| 第3節 | 出土遺物                 | 20 |
| 第4節 | まとめ                  | 21 |
| 第6章 | 調査成果のまとめ             | 21 |

## 挿 図 目 次

- 図 1 野洲川流域の遺跡群
- 図 2 伊勢遺跡全体図
- 図 3 伊勢遺跡周辺遺跡分布図
- 図 4 伊勢遺跡全体図および調査位置図
- 図 5 伊勢遺跡106次調査位置図
- 図 6 伊勢遺跡106次調査平面図・断面図
- 図 7 伊勢遺跡107・108・109次調査位置図
- 図 8 伊勢遺跡107・108・109次調査全体図
- 図 9 伊勢遺跡107次調査平面図
- 図10 伊勢遺跡107次調査断面図
- 図11 伊勢遺跡107次調査SX-1遺物出土状況・断面図
- 図12 伊勢遺跡107次調査SD-1集石遺構出土状況
- 図13 伊勢遺跡107次調査出土遺物実測図
- 図14 伊勢遺跡108次調査出土遺物実測図
- 図15 伊勢遺跡108次調査平面図・断面図
- 図16 伊勢遺跡109次調査全体図
- 図17 伊勢遺跡109次調査SD-1断面図
- 図18 伊勢遺跡109次調査出土遺物実測図

## 図 版 目 次

|      | 上                             | 下                  |
|------|-------------------------------|--------------------|
| 図版 1 | 伊勢遺跡106次調査 調査地全景（南東から）        | 調査地全景（東から）         |
| 図版 2 | 伊勢遺跡107次調査 T-1 全景（東から）        | T-1 全景（南東から）       |
| 図版 3 | 伊勢遺跡107次調査 T-1・T-2 全景（北西から）   | SX-1 全景（北から）       |
| 図版 4 | 伊勢遺跡107次調査 SD-1 全景（北から）       | SD-1集石出土状況（北から）    |
| 図版 5 | 伊勢遺跡108次調査 108次調査全景（東から）      | 108次調査全景（西から）      |
| 図版 6 | 伊勢遺跡108次調査 108次調査全景（南東から）     | 108次調査断割り（東から）     |
| 図版 7 | 伊勢遺跡109次調査 109次調査T-1 全景（南西から） | 109次調査T-1 全景（南から）  |
| 図版 8 | 伊勢遺跡109次調査 109次調査T-2 全景（西から）  | 109次調査T-2 全景（南東から） |
| 図版 9 | 伊勢遺跡107次調査出土遺物                |                    |
| 図版10 | 伊勢遺跡107次調査出土遺物                |                    |
| 図版11 | 伊勢遺跡108・109次調査出土遺物 108次調査出土遺物 | 109次調査出土遺物         |
| 図版12 | 伊勢遺跡109次調査出土遺物                |                    |



## 第1章 確認調査に至る経過と伊勢遺跡の歴史的環境

### 第1節 確認調査に至る経緯

昭和55年、伊勢町字中東浦において、民間の宅地造成工事に先立ち試掘調査を実施し、弥生時代の遺跡が存在することが確認された。その後、昭和55年12月、伊勢町字中東浦地先で、個人住宅建設に伴い調査を実施し、この地域に弥生時代後期の集落遺跡が存在することが初めて明らかになった。

最初に発見された町名から伊勢遺跡と命名し、周知の遺跡として現在に至っている。その後、昭和56年度には、伊勢町内の中東浦地区と大苗代地区で宅地造成工事に伴い発掘調査を行った結果、弥生時代後期の五角形住居を含む竪穴住居19棟、古墳時代前期の方形周溝墓8基が検出された。遺跡発見直後に、現在の伊勢町を中心に、大規模な弥生時代後期の集落遺跡が存在することが推測されるに至った。

翌昭和57年4月に農業用倉庫建築に先立つ発掘調査によって五角形住居が発見され、弥生後期前半代の良好な土器群が出土した。弥生後期の土器群は床面一括状況で出土したことから、野洲川流域及び滋賀県南部地域の弥生後期土器の編年上の指標となった。また、五角形の平面形を呈する竪穴住居がいくつも検出されたことから、滋賀県内では特異な内容をもつ遺跡として注目された。

平成2年、中東浦地区で倉庫建築に伴う発掘調査により、9棟の竪穴住居とともに長大な穴が4個検出された。その後、平成4年度に実施された発掘調査で、方形区画内の大型建物SB-2の棟持柱及び桁柱の一部であることがわかった。SB-2は桁行3間×梁行1間（7m×7m）の近接棟持柱付大型建物であることが判明した。この時の調査では大型の珍しい形状の土坑と認識され、大型建物の柱穴とは判断されなかった。近畿地方では、まだ弥生時代の大型建物は検出されておらず、平面形が長大な楕円形で、長い傾斜をもたせた深さ1.4mに及ぶ巨大な穴が、大型建物の柱穴とは認識されなかったのである。

その後、平成4年7月に隣接する栗東市の下鈎遺跡において近畿地方で初めて、独立棟持柱付大型建物が発見された。発見された時点では、歴史時代の建物とも見られたが、出土土器や柱材の年輪年代測定によって弥生時代後期の大型建物であることが判明した。

平成4年9月、伊勢遺跡で21次調査が実施され、弥生後期では全国最大規模の大型建物SB-1が検出された。近江南部地域の下鈎遺跡、伊勢遺跡で相次いで検出された大型建物は、近畿地方に大型建物が存在することが初めて明らかになった事例であり、弥生時代の研究史上でも重要な位置を占めている。

伊勢遺跡・下鈎遺跡の調査以降、大阪府池上・曽根遺跡や兵庫県武庫庄遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、京都府大藪遺跡などで大型建物が次々と発見され、近畿地方の弥生集落内部に大型建物が存在することが明らかになった。

伊勢遺跡では、平成6年に独立棟持柱付き大型建物が新たに発見され、柱穴から直径40cmを測るヒノキの柱根が出土した。平成6年から平成7年にかけて、道路建設や民間の宅地造成工事に伴う発掘調査によって独立棟持柱付大型建物が3棟、屋内棟持柱付大型建物1棟が新たに発見された。これらの大型建物の発見によって、伊勢遺跡は政治的に国へと統合されていく過程を探る重要な遺跡であることが明らかになってきた。近年、森岡秀人氏により、倭国の形成過程において重要な役割をもつ遺跡として「伊勢型」と呼称し、歴史的な意義付けがなされている。

守山市では、大型建物が次々と発見される伊勢遺跡の保存を図るため、文化庁、滋賀県教育委員会の指導のもと、平成10年度より範囲確認調査を実施し、遺跡の範囲および性格を把握することに努めた。平成10年度の調査では、独立棟持柱付き大型建物（SB-5）や楼観（SB-10）等の大型建物が新たに発見され、平成11年度の調査ではSB-1及びSB-11が同一地点で建て替えられていたことが明らかになった。平成13・14年度の確認調査では、阿村町側の調査によって独立棟持柱付き大型建物が等間隔に配置されていることが明らかとなった。さらに、床面積185㎡を測る大型竪穴建物が新たにみつき、床や壁に特殊な建築技術が採用されていることが明らかになったのである。

伊勢遺跡の範囲確認調査が進むとともに、大型建物が次々と発見され、国内でも類例をみない特異な遺跡であることが明らかになってきた。特に、伊勢遺跡中心部から東半部分にかけて大型建物が集中することが明らかになった。

確認調査では、基本的には平面検出調査を実施し、遺構の広がりや性格の把握に努めた。また遺構の性格や時期を決定する上で必要と判断される場合、文化庁及び滋賀県文化財保護課と協議のうえ、必要最小限の掘削調査を行った。なお、掘削調査を行った場合、シートおよび山砂で遺構を埋め戻し、地下遺構が傷まないように地下保存を図った。

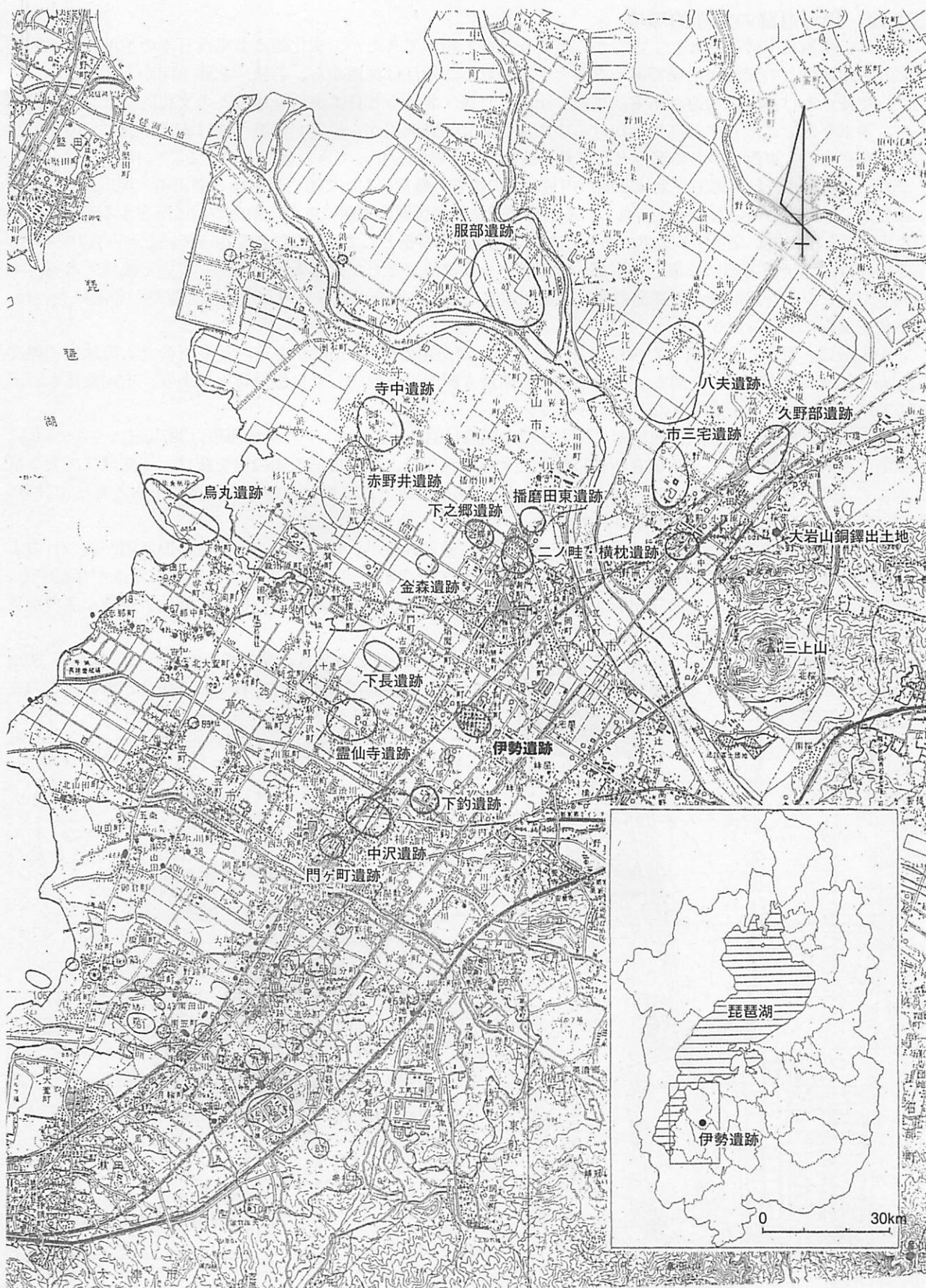


図1 野洲川流域の遺跡群

## 第2節 伊勢遺跡の地理的環境

近江は、東西日本の接点として古くから重要な役割を担ってきたが、文化的にも東西日本の地域色が流入しており、他地域との交流が活発であったことが窺われる。近江は湖西から、若狭・北陸へ向かう北陸道や、湖北から北陸へぬける北国街道がある。また、山陰・丹後・北陸など日本海沿岸地域との文化的交流も深い。さらに、湖東平野を北上し中部高地へ抜ける中山道があり、野洲川から伊賀・伊勢へ抜ける東海道などの主要な街道が存在する。東西日本の結節点として地勢的に重要な役割を担ってきた地域といえる。

また、東西日本、日本海沿岸地域と瀬戸内地域との物資の輸送においても、琵琶湖と瀬田川・淀川は、物流の大動脈として機能していたと考えられている。伊勢遺跡は琵琶湖の南側に広がる湖南地域に所在するが、この地域は東海道と中山道が交差する地点であり、古来より交通の要衝として重要な役割を担っていたとみられる。

守山市は、琵琶湖南部に位置し、京都・大阪のベッドタウンとして近年人口が増加している地域である。宅地開発やマンション建設などの開発の他、工業団地造成などの開発が進み、のどかな田園風景が急激に失われ、都市化が進行している。

守山市域は、野洲川が形成した沖積平野上にあり、湖岸線の標高85.6mから市内最高所の立入町地先の標高103.4mとの比高差は17.8mを測る。市内各所の微高地も野洲川が形成した自然堤防上にあり、市内全体が野洲川の沖積活動によって形成されたと考えられている。

鈴鹿山系から発した野洲川が琵琶湖に注ぐまでの距離は64Kmであり、その流域面積は387Km<sup>2</sup>に及んでいる。三重県と滋賀県の境に所在する御在所岳に源を発する野洲川は、野洲市三上山の裾を抜け、下流域に広大な扇状地を形成している。扇状地は緩やかに広がり、標高96m前後で氾濫原へ移行し、標高87mあたりまで続き、湖岸に向かって広大な三角州が形成されている。

現在の野洲川流域平野は、水平に堆積しているように見られるが、細かくみると無数の旧河道が網の目のように広がっている。野洲川の左岸では石部から栗東を経て草津市を流れる葉山川へ伸びる旧河道が存在する。さらに守山市立入町より、J R 守山駅北側から大門、欲賀町にかけて旧境川沿いには比較的大規模な窪みが見られるが、旧野洲川（旧境川）の支流と考えられる。

沖積平野の地下には、埋没した旧河道が網の目状に広がっているとみられ、発掘調査を行うと、幅10～30m程の旧河道が多数発見される。原始・古代の集落はそのような小河川沿いに営まれていることが多い。このよ



図2 伊勢遺跡全体図



うな小河川は、船で物資を輸送する運河のような役割を果たしていたと見られる。下長遺跡では、準構造船の部材や櫓が出土しているほか、瀬戸内・山陰・北陸・東海など全国各地の土器が出土しているが、琵琶湖や平野部に埋没している中・小河川を利用して船による交易を行っていたと考えられる。

伊勢遺跡は、標高98mから100mを測る扇状地上に形成された弥生後期の集落遺跡であり、東西方向に伸びる舌状の微高地上に広がっている。古墳時代前期の下長遺跡よりもさらに2km上流部に位置している。伊勢遺跡の南側には東西方向に伸びる谷地形があることがわかる。北西方向に伸びる旧河道が、伊勢遺跡の南側で西方向に流れを変え、栗東市大宝神社南側へと谷地形が伸びるものと推定される。

発掘調査によって、幅約30mを測る旧河道が埋没していることがわかっている。この旧河道は最下層で縄文晩期から弥生時代前期の土器が出土し、肩部や下・中層では弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物が出土する。この河川は、伊勢遺跡が衰退する弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて急速に埋没したものとみられる。古墳時代前期の下長遺跡でも旧河道の埋没時期と集落の衰退期が一致する傾向がみられるが、弥生・古墳時代の集落にとって河川は交易や物流の基幹として極めて重要な位置をしめていたことが推測されるのである。

伊勢遺跡はこの河川の北側に、東西方向に長く伸びる微高地上に所在しており、最高所は阿村町大洲地区から伊勢町日吉神社にかけて尾根状の高まりがみられ、標高99mから100mを測る。この東西にのびる微高地上に大型建物12棟を含む大規模な弥生後期の集落が営まれている。

弥生時代前期から中期、琵琶湖岸から三角州・氾濫原にかけて弥生集落が展開しているが、扇状地に集落が進出することはなかった。弥生時代後期、扇状地上に大規模な伊勢遺跡が進出しており、新しい集落の動態を読み取ることができる。その後、古墳時代には扇状地上に集落が進出する傾向が認められる。伊勢遺跡の大型建物は高い建物であったと想定されるが、建物からは野洲川下流域の集落や琵琶湖を行き来する船が見通せたことであろう。

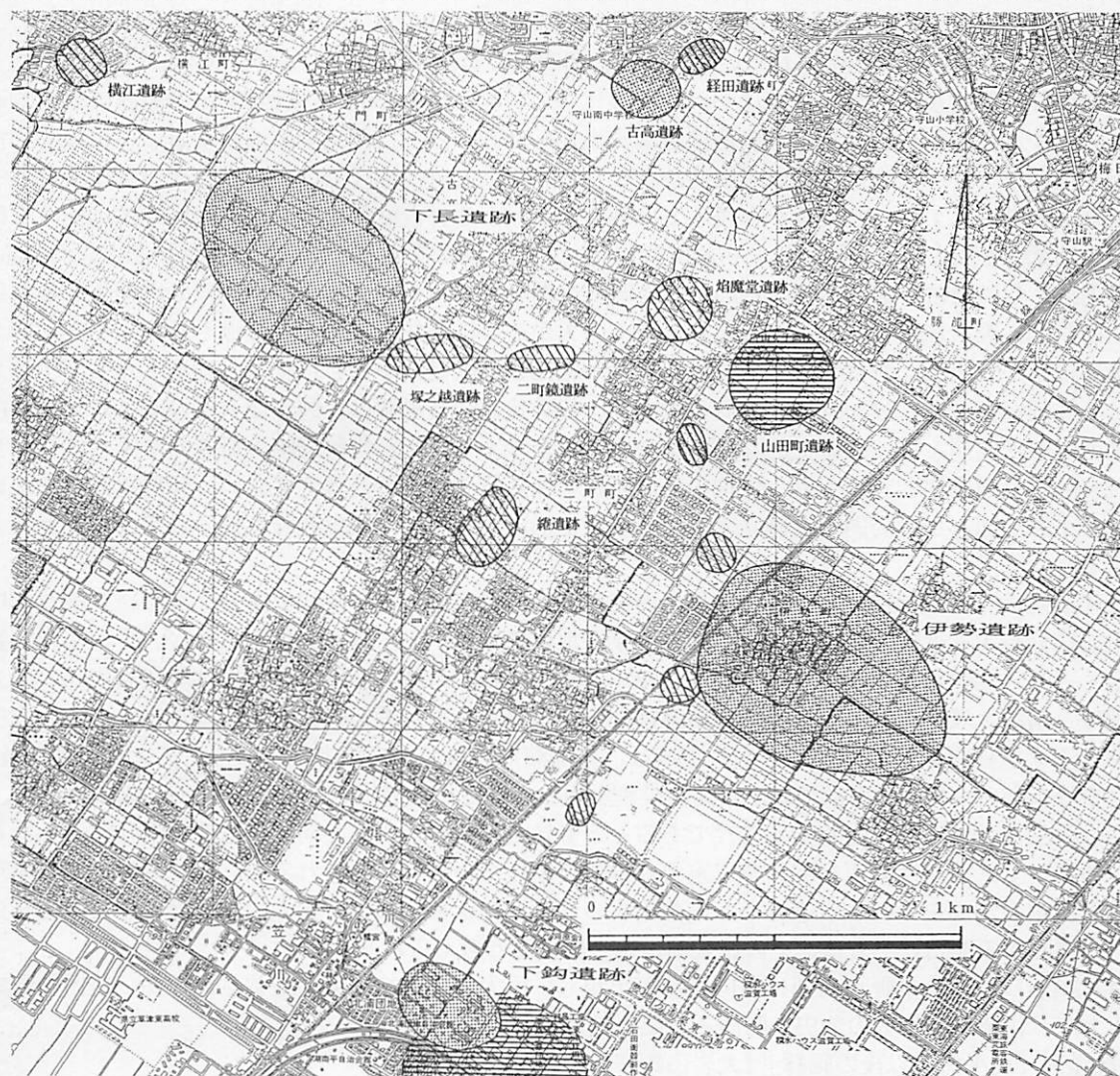


図3 伊勢遺跡周辺遺跡分布図

### 第3節 伊勢遺跡の歴史的環境

滋賀県の中央には広大な琵琶湖があり、周囲を比良山系や鈴鹿山系などに囲まれ、一つの独立した小世界を形作っている。しかし、近江の文化は古くから、隣接する若狭や北陸、東海・伊勢湾沿岸、そして近畿・瀬戸内地域との密接な交流が認められ、活発な地域間交流の結節点として重要な役割を担ってきたことが想定される。琵琶湖沿岸の平野部には縄文時代から古墳時代にかけて多数の集落遺跡が分布している。弥生時代前期、守山市服部遺跡では広大な水田跡が発見されており、本格的に水稻農業が開始されたことがわかっている。琵琶湖沿岸の低湿地を利用し古くから水田が開かれ、水稻農耕が定着し、人口も増加していった様子を窺うことができる。服部遺跡や寺中遺跡、小津浜遺跡など、低地に営まれた集落では、弥生時代前期から中期前半にかけての遺構や土器が出土することから、継続して集落が営まれていたと考えられる。

弥生時代中期後半になると扇状地末端に下之郷遺跡や播磨田東遺跡、二ノ畦・横枕遺跡などの大集落が進出するようになる。野洲川左岸に展開する環濠集落の特徴として、短期間に大規模な環濠集落が営まれ、隣接した地域に移動する傾向のあることが指摘できる。環濠集落内部から出土する遺物をみると、瀬戸内地域や近畿・東海地方の特徴をもつ土器が多数認められ、地域間交流が盛んに行われていたことが想定される。また、弥生時代中期末の二ノ畦・横枕遺跡では、鉄鏃や刀子などの鉄器が出土しており、紀元前1世紀には鉄器が流通するようになったことが想定される。弥生時代中期末から弥生時代後期初頭にかけて、大規模な環濠集落や拠点集落と呼ばれる継続性の強い大遺跡が近畿地方一円で解体する傾向がうかがわれる。近江でも例外ではなく、野洲川左岸域の環濠集落群が解体し、後期には小規模な集落が散在するようになり、集落景観が一変している。弥生時代前期から中期にかけて発展してきた弥生社会に大きな地殻変動が起こったことが想定される。野洲川流域でも弥生時代後期になると、小集落が分散居住する傾向が認められるが、このような状況の中で、かつて集落が営まれなかった扇状地の上に大規模な伊勢遺跡が出現し、発展している。伊勢遺跡が大規模であること、そして大型建物群が計画的に造営されている点など、同時代の集落遺跡とはまったく異なっている。

伊勢遺跡は弥生時代後期半葉から末にかけて巨大化していて、南北450m・東西700mの範囲において遺構が営まれているが、弥生時代後期末には集落は急激に衰退しはじめる。ただ完全に消滅するのではなく、古墳時代初頭から前期末にかけて小規模ながら集落が営まれている。大苗代地区では、その時代の集落に対応する方形周溝墓群が発見されており、集落が存続していることがわかる。古墳時代中期から奈良時代にかけての明確な集落遺構は見つかっていないことから、古墳時代前期末以降、集落遺跡としては空白期があると思われる。

以上の通り、伊勢遺跡が最も発達するのは弥生時代後期半ばであり、遺跡の東半部に大型建物が集中して建設され、西半部に竪穴住居群が営まれており、多くの人がそこに居住していたと推測される。そのピークは弥生時代後期中葉から後葉にかけてであり、実年代では紀元1世紀後葉から2世紀末と推測される。伊勢遺跡の出現期は、倭国が百余国に分かれていた時代であり、伊勢遺跡の衰退期は、魏志倭人伝に記された30余国が属する邪馬台国の形成期といった歴史的な転換期であったと考えられる。伊勢遺跡の発達する時代は、ムラから国へと統合される激動期と考えられ、倭国の形成過程を探る特異な遺跡と考えてよい。伊勢遺跡は、地域的に形成された小さな国々が、倭国王を擁立する連合政権を形成するまでの歴史過程を探る重要な遺跡と考えることができる。

弥生時代後期は「見る銅鐸」とよばれる大型の突線紐式銅鐸が発達する時代である。突線紐式銅鐸には近畿地方を中心に分布する近畿式銅鐸と、伊勢湾から東海地域に分布する三遠式銅鐸があるが、野洲市の大岩山では近畿式・三遠式銅鐸が合わせて埋納されていた。近年、銅鐸の系統的な研究から、突線紐式銅鐸の成立が近江南部地域と摂津地域、そして東海地域との連携の中で理解されると考えられるようになっている。弥生時代後期における大型銅鐸を共通の祭器とする地域は、東部瀬戸内地域から東海地方に至る広大な範囲に及ぶが、その成立や分布からみて近江南部地域が重要な役割を担っていたことが想定されている（難波洋三2011）。弥生時代後期は弥生社会が大きく変貌する時代であるとともに、倭国の形成へと向かう重要な時代であったと考えられる。その中で、近江は東西日本を繋ぐ重要な役割を担っていたと考えられるが、近江南部地域に出現する伊勢遺跡は倭国の形成を牽引する遺跡として評価することができる。弥生時代の終焉とともに伊勢遺跡は衰退するが、古墳時代の開始とともに、その歴史的役割を終えたと考えられる。

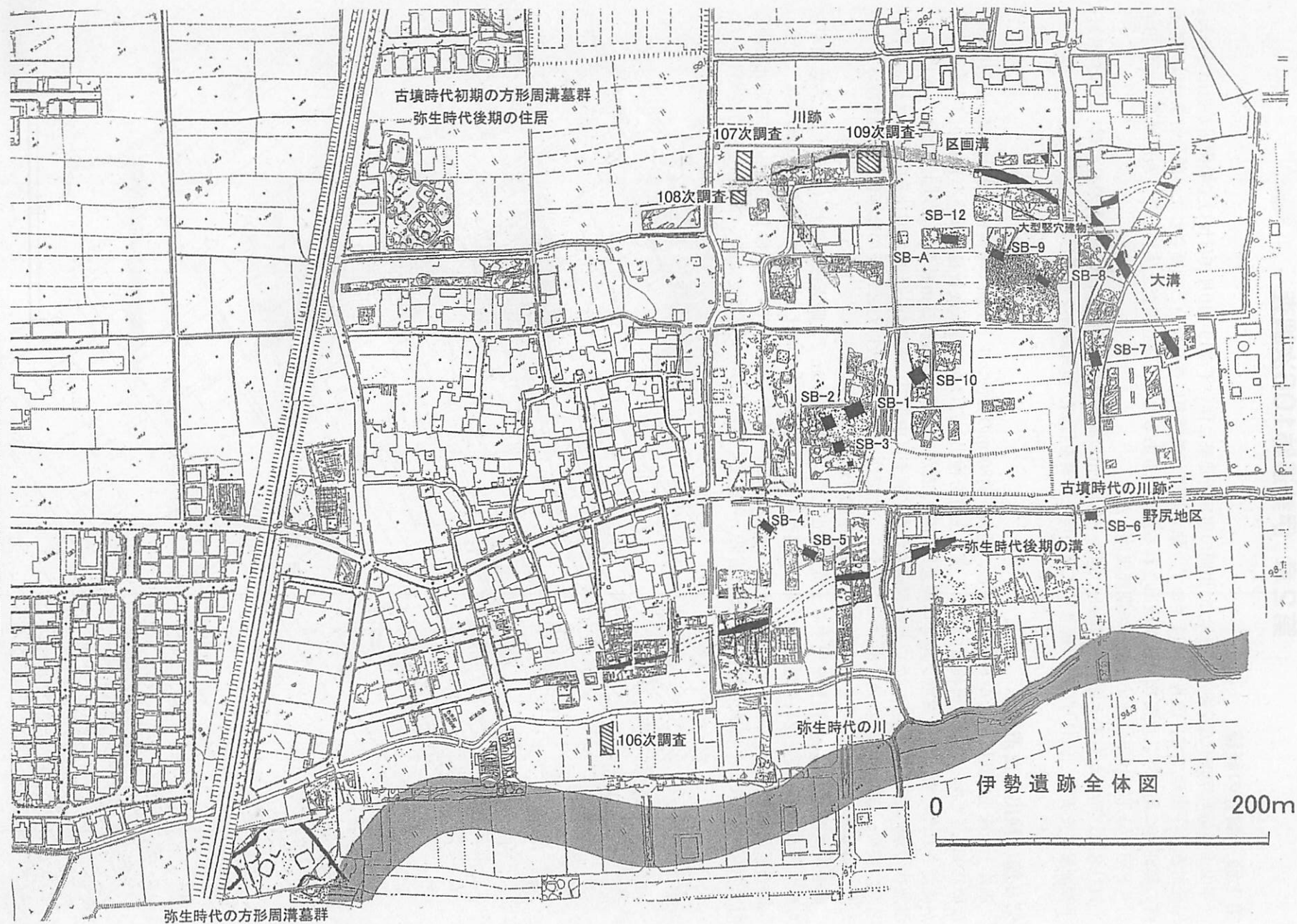
古墳時代初頭には奈良平野東南部に纏向遺跡が出現し、巨大な前方後円墳が造営されるが、倭国の形成過程を考える上で、伊勢遺跡はその前史を物語る重要な位置を占めている。

（註）難波洋三「扁平紐式以後の銅鐸」『大岩山銅鐸から見えてくるもの』

滋賀県立安土城考古博物館平成23年度春季特別展図録、2011. 4



図4 伊勢遺跡全体図および調査位置図



## 第2章 伊勢遺跡106次調査

### 第1節 調査の経緯

守山市伊勢町字南代627番の水田地で、民間の事務所建築に伴い平成19年10月16日付けで発掘届が提出された。開発計画は平屋建てで、改良工事は伴わず、独立基礎が遺構面に達しないと判断された。開発対象地は伊勢遺跡の範囲内にあたり、重要な遺構が検出される可能性もあるため、確認調査を実施した。現地調査は平成19年11月8日から平成19年11月10日までの期間実施した。

11月8日（晴）から表土掘削を開始し、地表下約80cmの高さで遺構検出を行い、11月9日（晴）に写真撮影・平板測量等を実施し、11月10日（曇り）に埋め戻し作業を行い、現地調査を終了した。

### 第2節 検出した遺構

耕作土・床土、黄灰色シルト等を除去し、地表下約80cmの黄色シルト上面で遺構検出を行った。遺構検出面は標高96.2mであった。遺構検出の結果、溝・土坑を検出したほか、青灰混黄色シルト（10G 4／1）の堆積が確認された。青灰色混黄色シルトは調査区西隅に広がっており、幅約5m長さ3.5m以上にわたり検出した。湿地状の地形がひろがっていたことが想定された。調査区中央で、南西から北東に伸びる暗渠排水施設を検出した。戦後、この地域が湿地であったことから、竹で作った暗渠を設けたと地元の地権者より聞き取りしていたが、事実この地域では多くの暗渠排水施設が確認されている。

調査区南西隅中央で楕円形を呈する土坑を検出した。直径約80cmで、暗灰色粘質土（N 5／0）の堆積がみられた。周辺部の調査成果や堆積土の質・色調からみて、鎌倉～室町時代にかけての遺構と思われる。

調査区北東隅において現井上川に並行して流れる溝SD - 1の一部を検出した。幅1m以上、深さ35cmを測る断面U字形の溝で、一部断ち割りを行った結果、一旦浅く落ち込み中央部で更なる深くなる様子がうかがわれた。

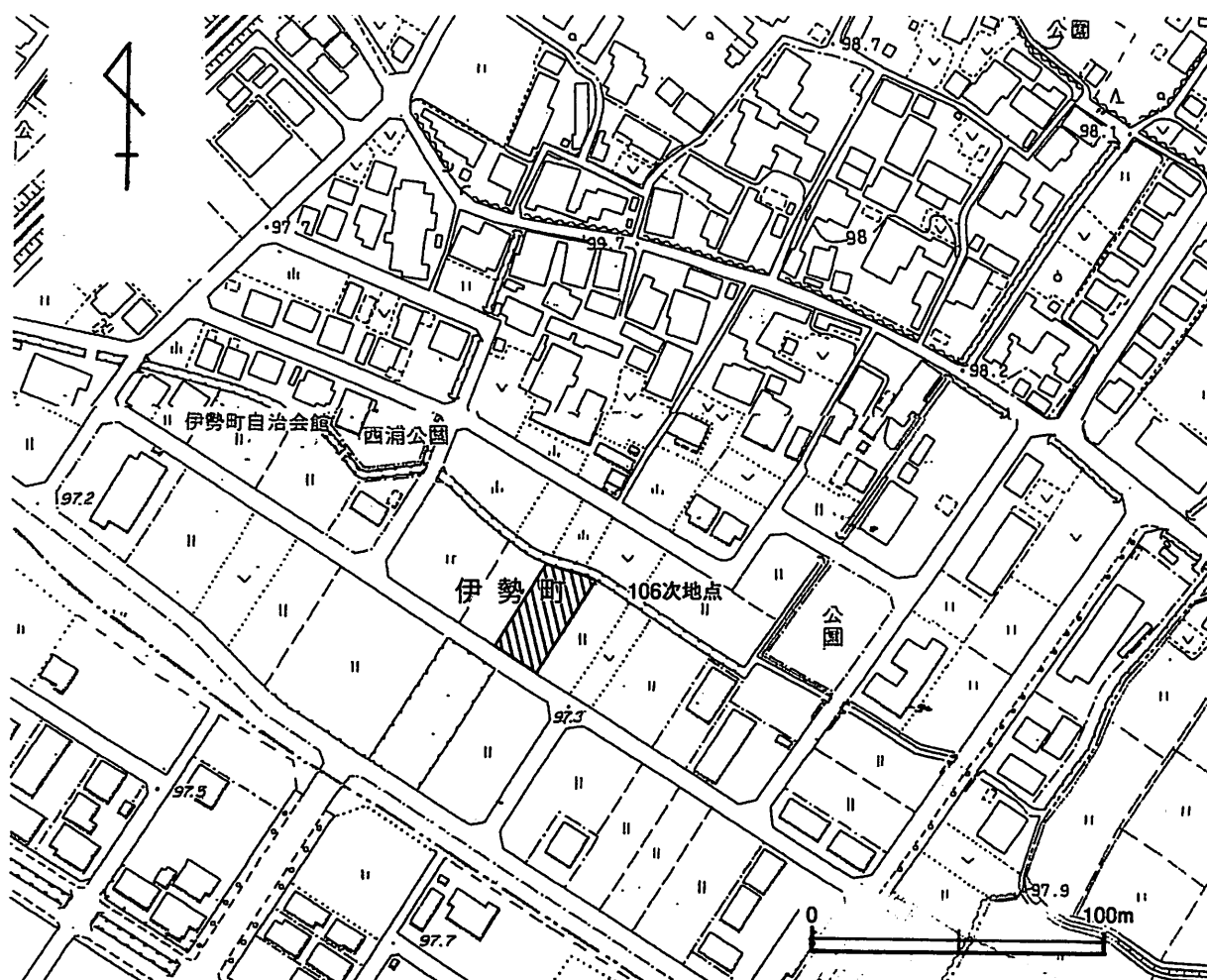


図5 伊勢遺跡106次調査位置図

中央底には暗黒褐色粘土の堆積がみられたが、中層から上層にかけて灰褐色～青灰色の砂質土の堆積が認められ、著しい水流があったことが想定された。平成5年から平成7年にかけて実施した土地区画整理事業に先立つ発掘調査では、今回の調査地周辺からは現井上川に沿って多数の溝が検出されている。その年代は奈良時代から鎌倉時代にかけての溝であり、今回の調査で検出された溝も古代から中世の遺構と想定される。遺物等は検出されなかった。

### 第3節 まとめ

今回の調査地点では、遺構密度は希薄で、古代から中世とみられる溝SD-1と土坑1基を検出するにとどまった。昭和初期から区画整理事業が行われるまで、この地域はたびたび井上川が氾濫し、水漬けになっていたといわれるが、今回の調査で遺構がほとんど検出されなかった事、湿地状の地形がひろがっていたと考えられる事から、低湿地がこの周辺に広がっていたことが想定された。

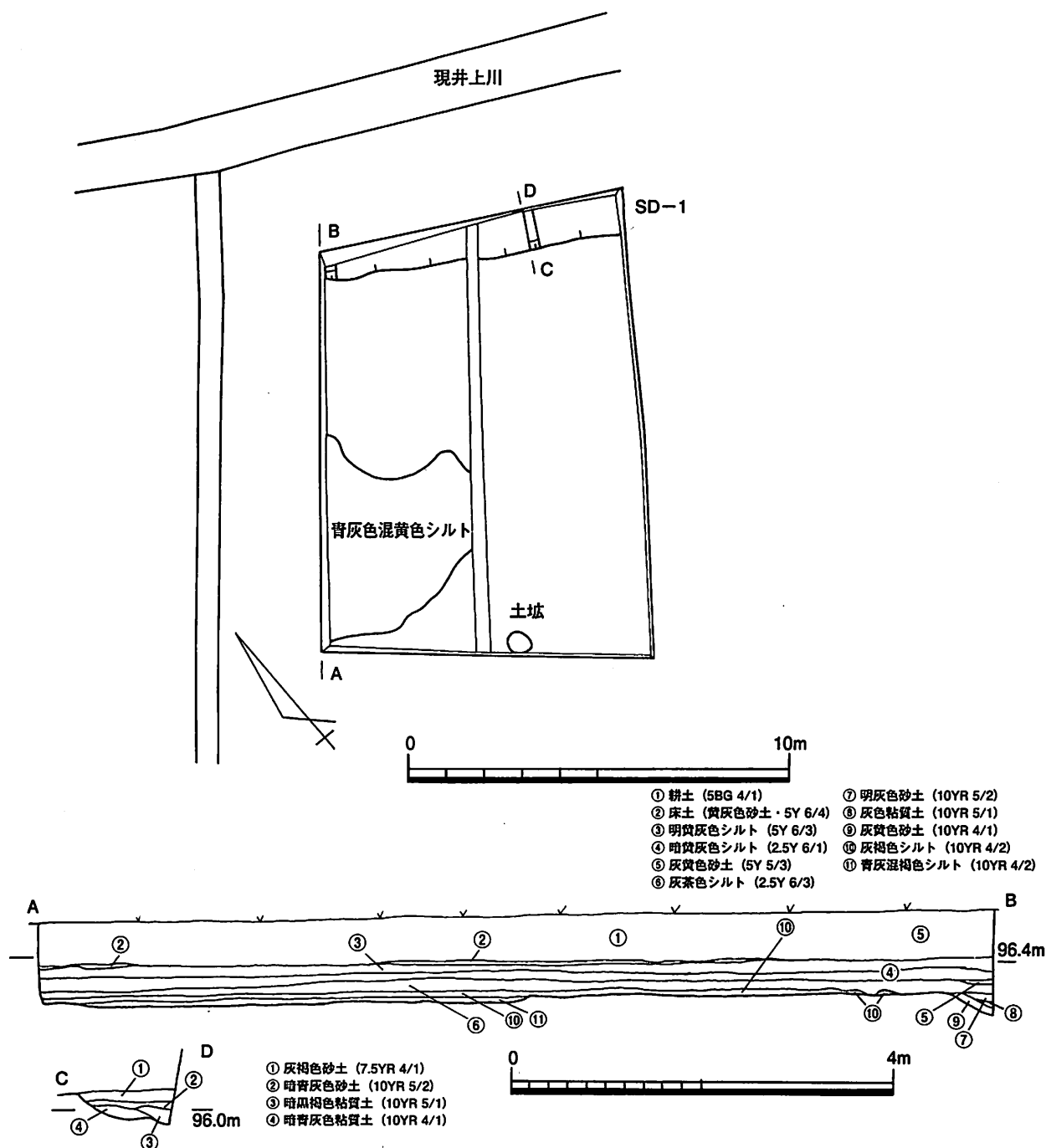


図6 伊勢遺跡106次調査平面図・断面図



### 第3章 伊勢遺跡107次調査

#### 第1節 調査の経緯

平成19年度より、近畿財務局大津財務事務所が所管する守山市伊勢町字北東浦56-2・57・59番(3,434.91㎡)の土地が伊勢遺跡の重要な範囲内にあたるため、守山市教育委員会が管理業務を行う委託契約を締結した。この場所では平成11・12年に確認調査(62次・67次調査)を実施し、焼土塊遺構や弥生時代後期の竪穴住居等を検出している。管理委託地の中で、確認調査を行っている範囲は狭く、重要な遺構が存在する可能性があるため、大津財務事務所長宛に平成19年12月18日付けで確認調査に伴う承認申請書を提出し、調査を開始した。現地調査は平成20年1月15日から同3月21日の期間実施した。調査過程は以下の通りである。

##### 調査日誌抄

- 1月15日(晴れ) 表土掘削を開始。道具等を搬入する。
- 1月18日(晴れ) 遺構検出を進める。
- 1月23日(晴れ) 遺構検出作業を行う。
- 1月28日(曇り) 排水作業。写真撮影のため、清掃作業を行う。
- 2月4日(晴れ) 排水作業。遺構検出を進める。
- 2月8日(曇り) 測量杭の設置。平板測量・レベル記入を行う。
- 2月12日(曇り) 排水作業。西壁断面の分層を行い、断面実測を進める。
- 2月15日(曇り) 排水作業。SX-1の断ち割りを行い、実測作業を進める。

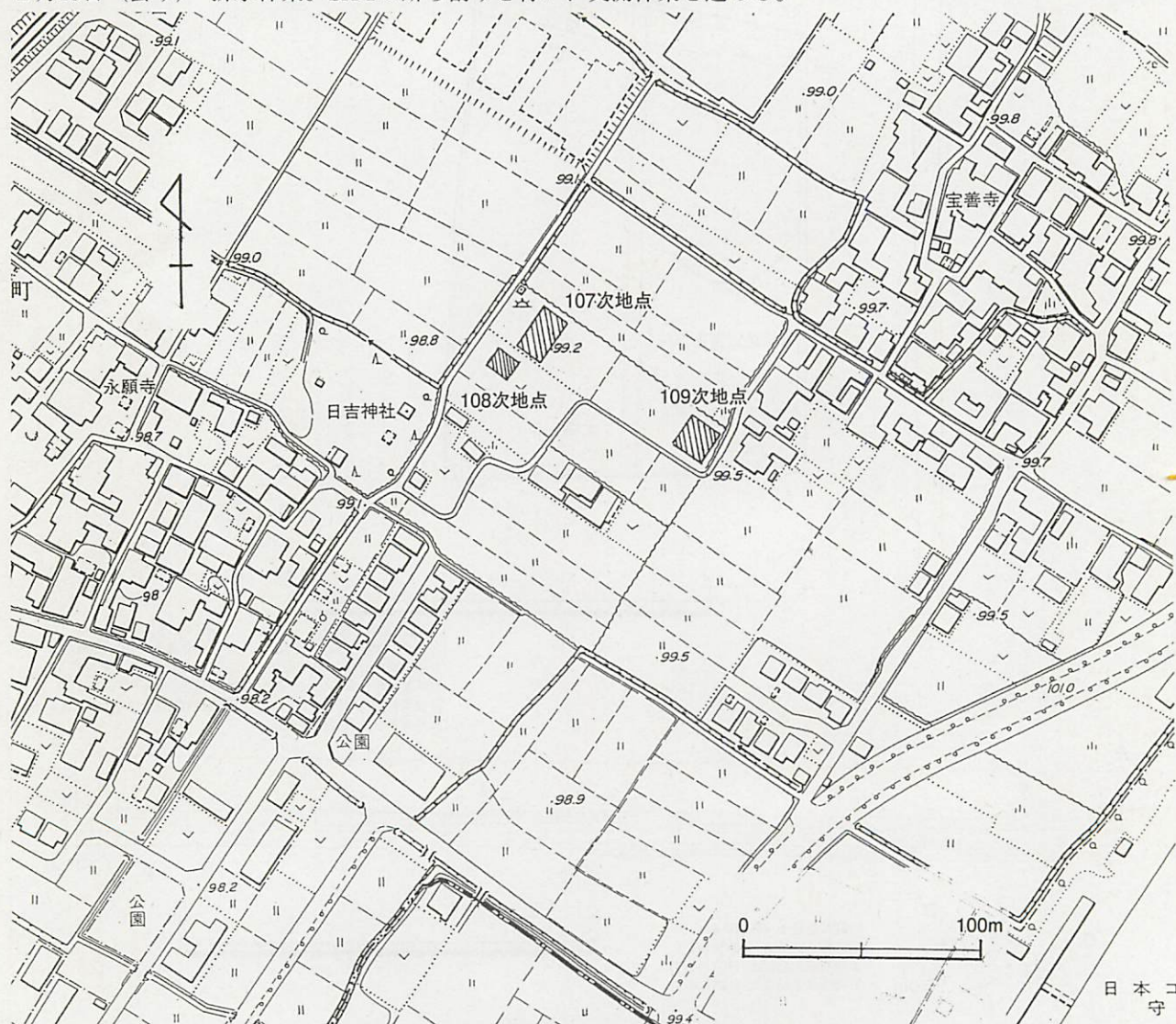


図7 伊勢遺跡107・108・109次調査位置図

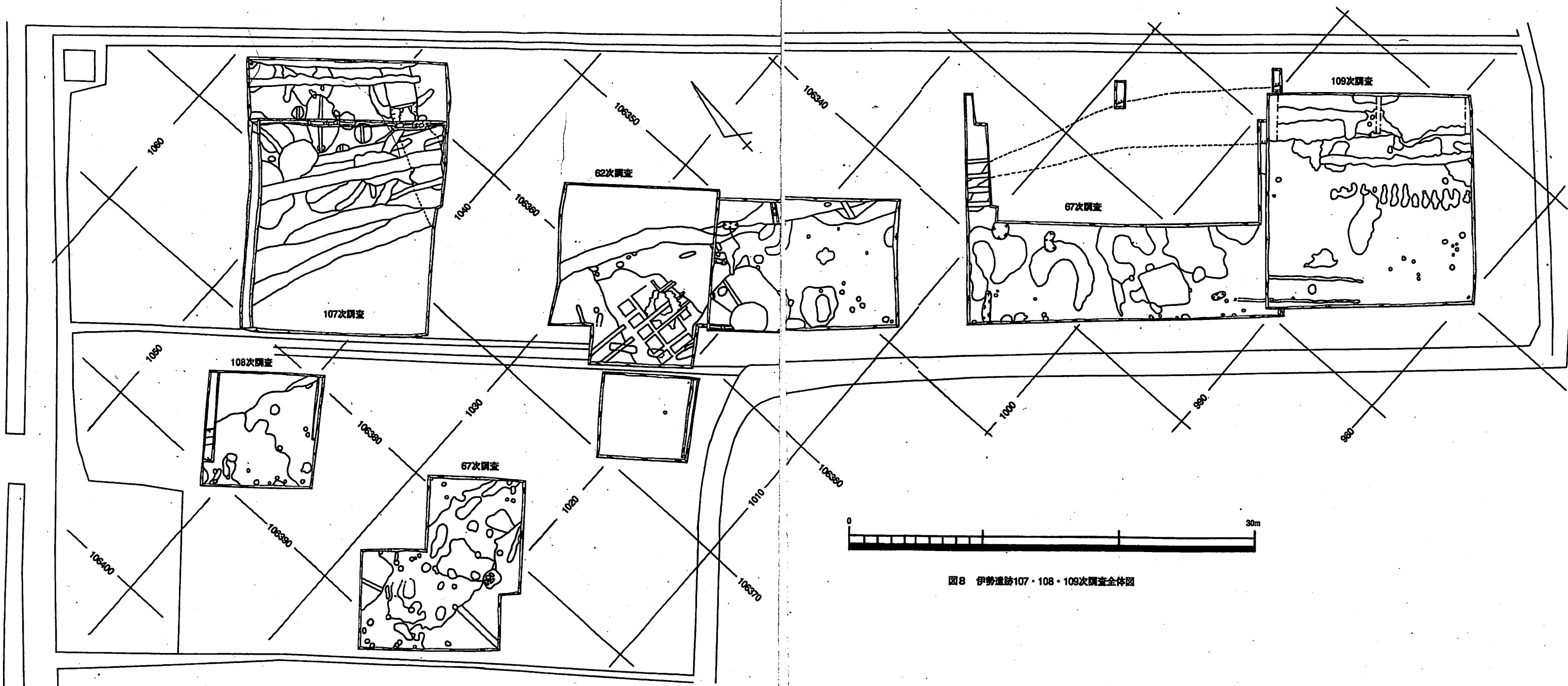


図8 伊勢遺跡107・108・109次調査全体図



2月22日（晴れ） T-2を設定し、拡張作業を行う。平面検出作業を進める。  
2月25日（晴れ） 平面検出・清掃作業を進め、検出状況写真撮影を行う。  
2月29日（晴れ） SD-1を部分的に掘削。集石遺構を確認。清掃作業を進め写真撮影。  
3月4日（晴れ） SD-1の平・断面図の作成。レベル記入を行う。  
3月6日（晴れ） SD-1、SX-2の実測作業。出土状況図の作成。  
3月11日（晴れ） 調査区全体の平板測量。平面測量を進める。  
3月18日（晴れ） 掘削場所に山砂を入れ、埋め戻しを行う。  
3月21日（雨） 整地作業。道具の搬出。現地調査の終了。

## 第2節 検出した遺構

耕作土・床土、灰褐色砂土、灰茶色粘質土を除去し、表土より約35cm下の黄色シルト～明茶褐色粘質土（地山）上面で遺構検出を行った。調査の結果、旧河道・溝・土坑等を検出した。旧河道の北東側肩口では砂層の複雑な堆積がみられ、旧河道が度々氾濫していたことが想定された。南西側にトレンチ1（T-1）を設定し平面検出を行ったが、北壁際に側溝トレンチを設け下層確認を行った結果、SD-1の集石遺構を確認したため、さらに北側を拡張し（T-2）調査をすすめた。

### 旧河道

調査区南西側で南北方向にのびる旧河道を検出した。幅約10m以上、深さ60cm以上と推定され、トレンチ西壁の断割り調査を行った結果、旧河道の中央部に砂礫層が厚く堆積していることが観察され、かなり深い川であったことが想定された。旧河道には灰白色～灰黄色の砂土・砂礫、褐色粘質土等が互層に堆積しており、激しい水流があったことがうかがわれた。旧河道の中央部には、こぶし大の礫を含む灰褐色砂含粘質土（7.5YR4/1）が堆積していた。北側肩口には灰白黄色砂土（10YR6/2）、灰黄色砂・礫（2.5Y1/1）が並行し帯状に堆積していた。さらに北側へと灰黄色砂土（10YR 4/1）が堆積しており、たびたび川が氾濫していたことがうかがわれた。旧河道内からは古墳時代後期末から奈良時代にかけての須恵器片や、平安時代の緑釉の土師皿や布目瓦などさまざまな時代の遺物が出土している。弥生時代後期の溝SD-1が切られており、既往の調査では中世とみられる柱穴や土坑が切られていることから、中世以降の川跡と考えられる。

### 溝

**SD-1** 調査区北東隅において、南北方向にのびる溝SD-1の一部を検出した。SD-1に直交するSD-2・4・5・6・7および旧河道に切られている。溝の一部を断割り調査を行ったところ、幅約2.1m、深さ90cmを測る逆台形の断面形を呈する溝であることがわかった。溝が完全に埋まった後、溝肩口で長径120cm以上、深さ40cmを測る土坑1が検出された。埋土は黒褐色粘質土で、弥生後期から古墳時代初頭の遺構とみられる。溝を長さ約2mにわたり掘削調査を行ったところ、中・下層より多量の石が集中して出土した。石は直径5～20cm程の大きさで、掘削調査を行った北側と南側の2箇所、約1mの範囲に集積されていた。南側の集石はセクション南側へ続く状況で、土坑1の埋没過程で土坑底に石が転落していることが確認された。石は加工された痕跡のない自然石で、溝底からやや浮いた状態で集積されていた。溝の堆積状況を見ると、上層には砂土の堆積が見られたが、中・下層には灰褐色（10YR 2/1）～黒褐色粘質土（7.5YR 2/1）がレンズ状に堆積しており、ゆっくりと埋没していった様子がうかがわれた。伊勢遺跡内ではこのような集石遺構は見つかっておらず、何のために溝底に石が集積されたのか不明である。

溝内からはほとんど遺物はみられなかったが、受口状口縁甕などの土器細片が出土したことから、伊勢遺跡がもっとも発達する弥生時代後期の遺構とみてよい。

**SD-2** 旧河道に並行し、東西方向にのびる溝SD-2を約7.5mにわたり検出した。埋土は明茶褐色粘質土（10YR 2/2）で、SD-1を切っており弥生時代後期以降の遺構であるが、東西方向にのびる灰白色砂土が堆積する他の溝より古い溝とみられる。

**SD-4・5** 現在の地割りに沿った溝で、明灰白色砂が堆積していた。現在の栗太郡地割りに沿うもので、近世の耕作痕とみられる。

**SD-6・7** 旧河道に並行してのびる溝で、灰白色砂土（2.5Y 6/1）が堆積していた。SD-6は幅約1mで旧河道からのびる砂層の堆積や他の遺構を切っており、最も新しい遺構とみられる。SD-7は幅約30cmで4.5mにわたり検出した。溝の西端はSD-8に切れ、灰白色砂土の堆積がみられた。

**SD-8・9** 東西方向にのびる幅30～50cmを測る小溝で、暗灰黄色砂土（2.5Y 4/1）の堆積がみられた。

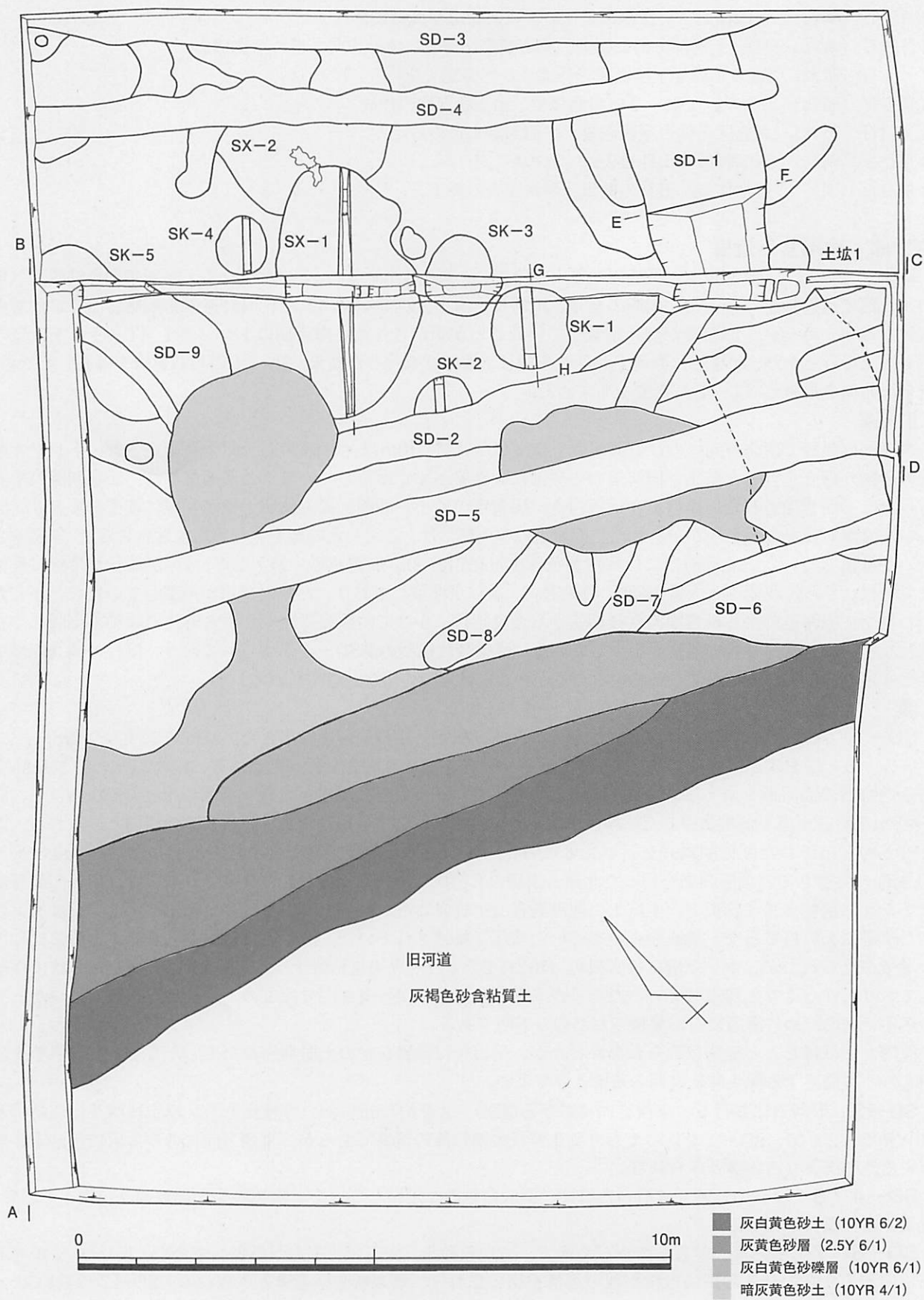


図9 伊勢遺跡107次調査平面図



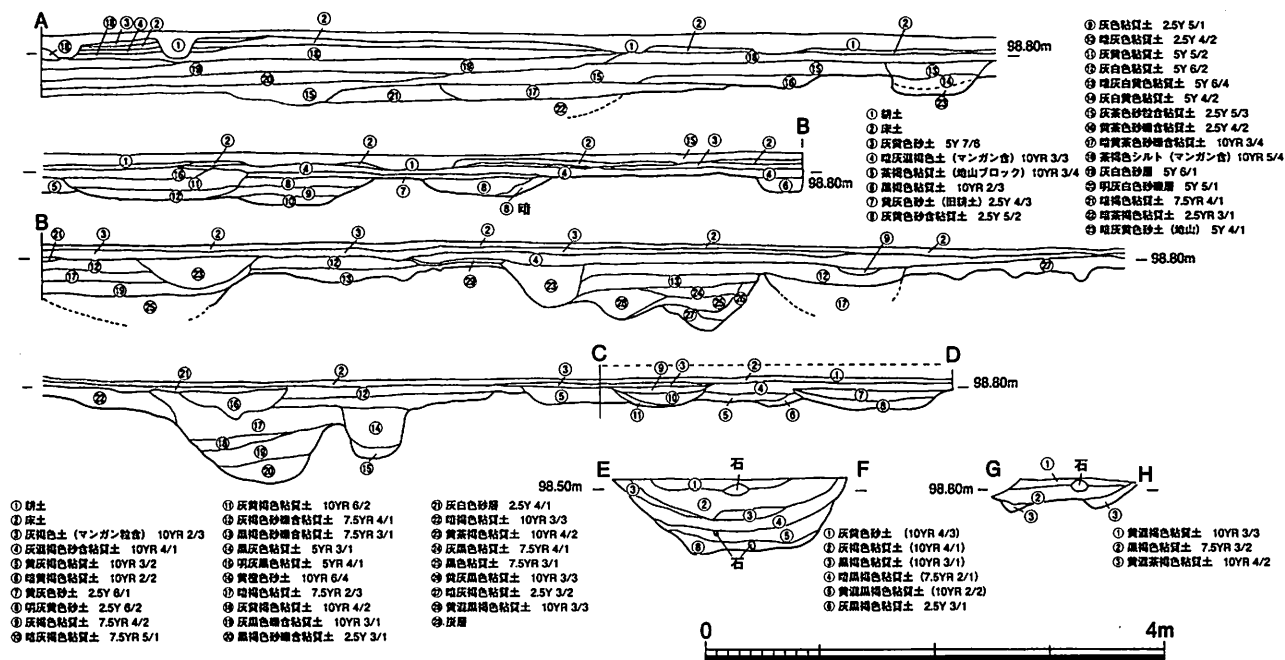


図10 伊勢遺跡107次調査断面図

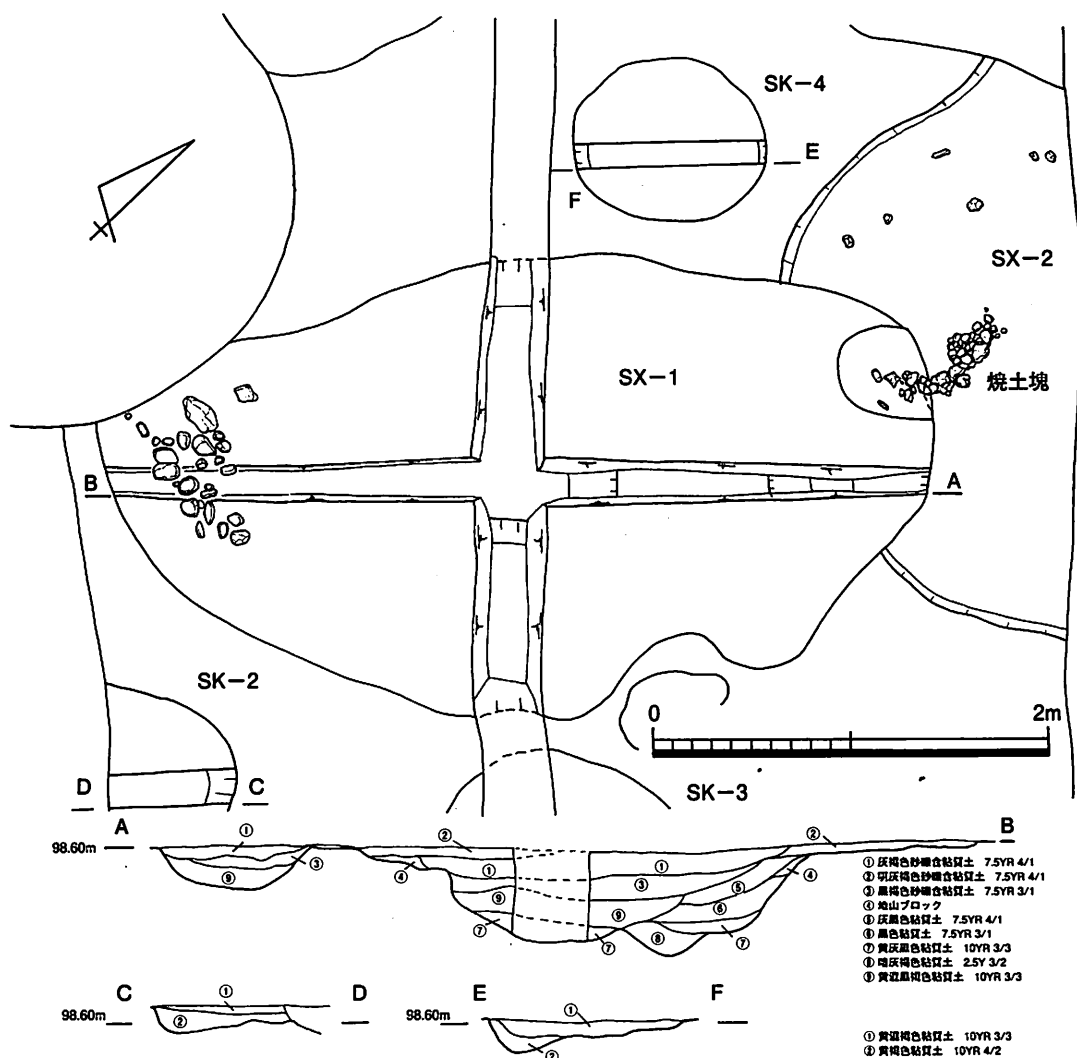


図11 伊勢遺跡107次調査SX-1遺物出土状況・断面図

旧河道、SD-6などに切られており、他の溝方向と異なることから時期差があるとみられる。

**SD-10** 南北方向に弧を描きながらのびる小溝で、幅30cmを測る。灰褐色～黒褐色粘質土（10YR 2/3）の堆積がみられ、砂だまりに切られるが、弥生時代後期とみられる土坑SK-5を切っていた。

**土坑** 旧河道およびそれに並行する溝の北側には暗黄灰色シルト（地山）の安定した堆積がみられ、複数の土坑群を検出した。

**SK-1** 長径1.4mを測る楕円形を呈する土坑である。深さ30cmで浅く碗状に落ち込む断面形状をもつ。黄混褐色（10YR 3/3）～暗褐色粘質土（7.5YR 3/2）のレンズ状の堆積がみられた。遺物は出土しなかった。

**SK-2** SD-2に切られた直径1mを測る土坑の一部を検出した。深さ14cmを測る浅い落込みで、黄褐色粘質土（10YR 4/2）の堆積がみられた。遺物は出土しなかった。

**SK-3** 長径1.3mを測る楕円形の土坑である。深さ30cm以上で深い碗状の断面形を呈す。暗褐色粘質土（7.5YR 2/3）の堆積がみられた。遺物は出土しなかった。

**SK-4** 長径105cmを測る楕円形の土坑である。深さ約15cmを測る浅い落込みで北東側がやや深くなっていた。黄褐色粘質土（10YR 4/2）の堆積がみられたが、遺物は出土しなかった。

**SK-5** T-1の北隅で、砂だまり及びSD-10に切られた状態で、その一部を検出した。長径3.8m、短径2.2mを測る長楕円形を呈する土坑である。深さ40cm以上あり、深い碗状の断面形を呈する。下層には黒色粘質土（7.5YR 3/1）の堆積がみられた。遺物は出土していない。

**SX-1** T-1・2にまたがって長楕円形の落込みを検出した。長径4.2m、短径2.3mを測る。深さ50cmを測り、深い逆台形の断面形を呈す。砂礫を含む灰褐色粘質土（7.5YR 4/1）～黒褐色粘質土（7.5YR 3/1）のレンズ状の堆積が認められた。南西隅では直径5～20cmほどの集石がみられた。集石がみられた場所は5cmほどの浅い落込み部分で、断割りを行った結果、土坑全体には広がっていないことが判明した。断面観察の結果、北東隅に直径70cmを測る土坑があり、二つの遺構であることがわかった。深さ20cmを測る浅い碗状の断面形を呈し、黒褐色粘質土（10YR 3/3）の堆積がみられた。遺物等は出土しなかった。

**SX-2** T-2北西隅において、SX-1に切られた状態で浅い落込みを検出した。長径3.5m以上、短径3mを測る楕円形の落込みで、一部を掘削した結果、深さ5cmほどの浅い落込みであることがわかった。埋土中には石が散在していたほか、焼土塊が帯状（70cm×20cm）に残存していることがわかった。このような遺構は、同調査地点から南方15mの地点で行った62・67次でも検出されているほか、74次調査で発見された大型竪穴建物の床面の遺構と類似するものである。その機能は不明であるが、住居の床施設の一部である可能性がある。埋土中から甕底部と見られる破片が出土しており、弥生時代後期の遺構と見られる。

### 第3節 出土遺物

集石遺構が確認されたSD-1からは1～5の弥生土器が検出された。1・2は受口状口縁甕の口縁部である。1は水平にのびる第1口縁から鋭く屈曲し、上方へ直角に立ち上がる第2口縁部が付く。上端部はやや外方へつまみだされている。2は外上方へのびる第1口縁からやや内傾気味に立ち上がる第2口縁部が付く。端部はやや外方へつまみ出されている。文様・調整ともに不明であるが、口縁形状からみて弥生時代後期中～後葉の遺物と見られる。3は受口状口縁甕の下腹部の突帯とみられる。劣化のため突帯の文様は不明であるが、断面観察から貼付け突帯とみてよい。弥生時代後期の所産とみてよい。4は叩き甕の下腹部の破片である。底部に近い部位とみられ、下方にいくにしたがって肉厚になる。外面には横方向の叩き目が残る。5は高杯脚中部の一部と見られるが、挿入式の脚中部である。

SX-2からは6～9が出土している。6は甕底部とみられる。やや突出する小型の底部で、若干上げ底となっている。弥生時代後期の遺物とみられる。7～9は焼土塊の破片である。表面は赤橙色（5YR 6/6）に発色しており、内面は明黄褐色（10YR 5/2）である。62・67次調査で発見された焼土塊や、大型竪穴建物の床材と類似するもので、精良な粘土を用いられている。

旧河道からは11～22の遺物が検出されている。11は土師器の甕で、奈良時代の長胴甕の一部とみられる。12は土師器の甕で、肩の張らない体部から屈曲し、外上方に短く立ち上がる口縁部が付く。13～16は須恵器の杯身で、小型の杯身に短くのびる口縁部が特徴である。15はやや古い形状を呈しているがいずれも6世紀末から7世紀初めの遺物とみられる。17は円筒形の土師器で、内面につなぎ痕が観察される。9世紀代の高杯脚中部とみられる。18は須恵器の壺とみられ、肩部に耳が付く。19は碗の底部で、胎土の特徴から緑釉碗とみられる。断面が三角形を呈す高台が付き、11世紀初頭の遺物と考えられる。20・21は丸瓦の破片で、ともに内面に布目

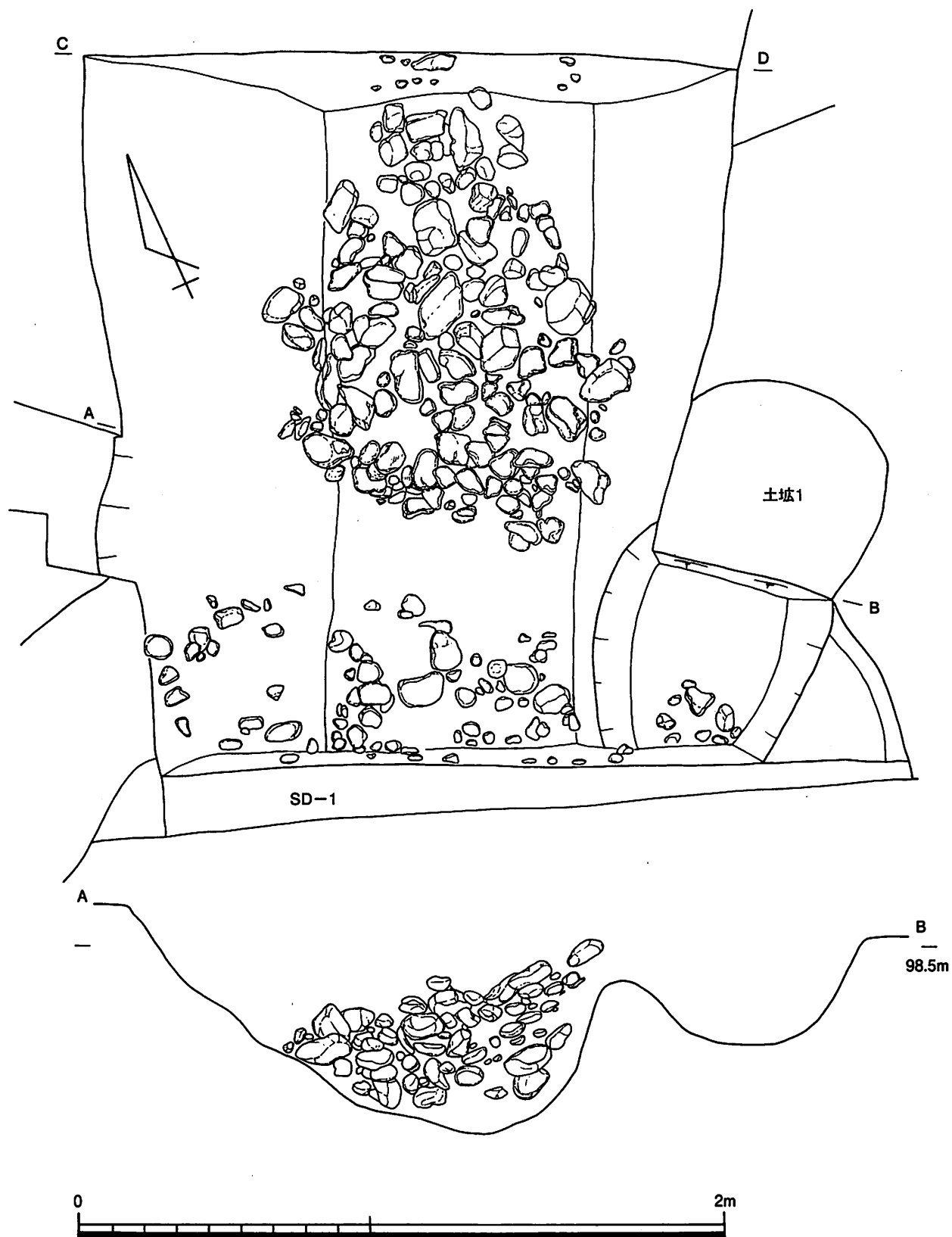


図12 伊勢遺跡107次調査SD-1集石遺構出土状況

が残る。2点とも激しくローリングを受けており、上流から流されてきた遺物と思われる。表面は赤褐色（7.5YR 5/4）を呈す。22は長方形の砥石である。砂岩質の石材で表面に使用痕が残る。旧河道からは、以上のとおり古墳時代後期から古代にかけてのさまざまな時期の遺物が出土した。



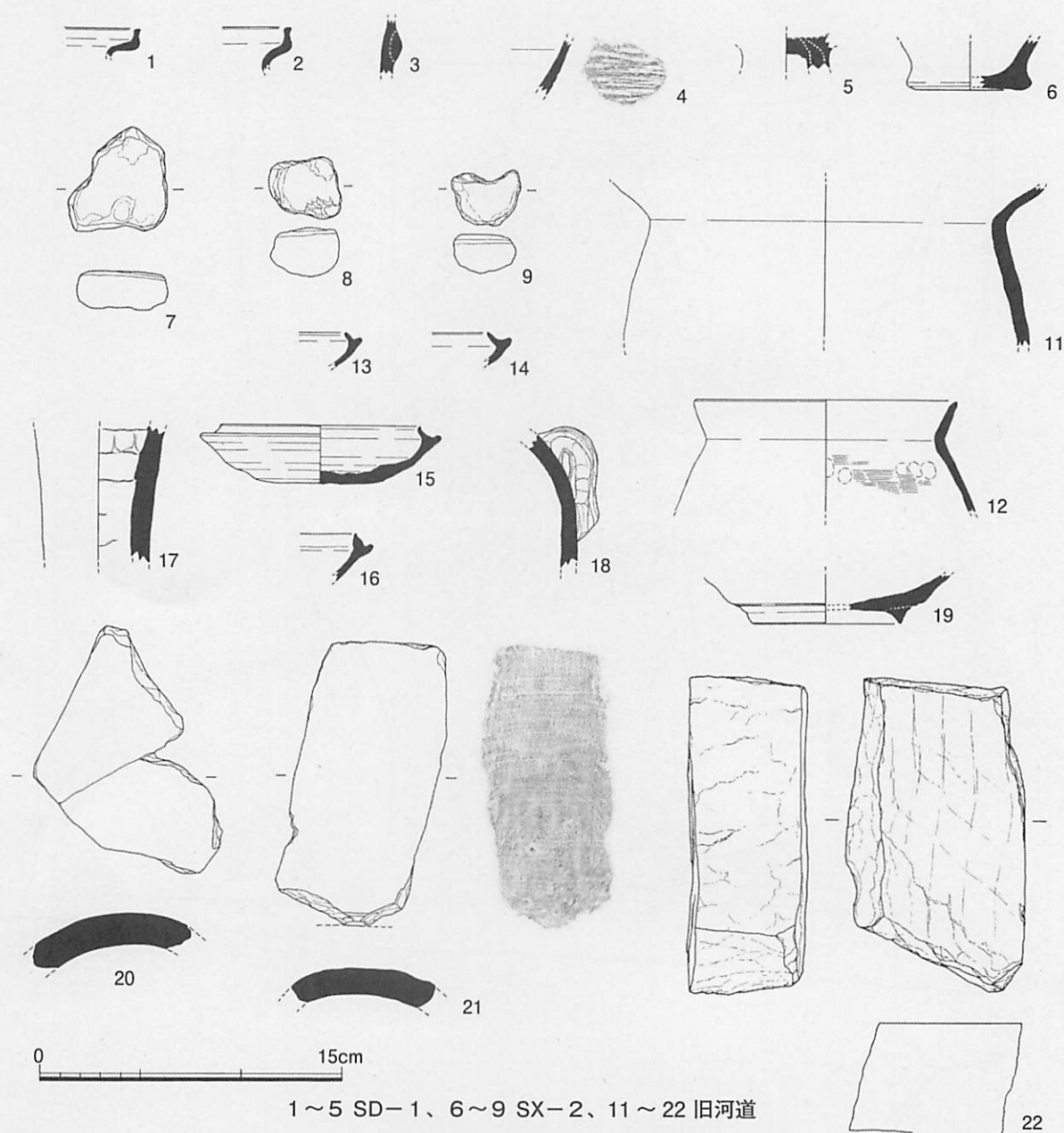


図13 伊勢遺跡107次調査出土遺物実測図

#### 第4節 まとめ

今回の調査では、旧河道・溝・土坑等が検出された。この地域に東西方向に流れる旧河道が存在することは既往調査でも予想されていたが、今回の調査で幅約10mあることが確認された。旧河道の時期であるが、古墳時代から平安時代にかけての遺物が出土していることや、中世の柱穴・土坑が旧河道に切られていることを考えると、中世から近世にかけて流れていた川である可能性が高い。同調査地点から西50mの地点で行った64次調査では、幅13mの旧河道が確認されており、位置関係からみて同一の遺構とみてよい。64次調査でも古代の遺物が出土しているが、近世と見られる陶器片が含まれていたことから、中世から近世の川である可能性が高い。地籍図にも旧河道に沿って水路が残存していることから、近代まで水路として機能していたと考えられる。

旧河道の北側では、弥生時代後期から古墳時代初頭の溝SD-1や土坑が発見されたことから、弥生時代後期の遺構が、旧河道より北側へ広がっていることが判明した。特にSD-1は南北方向にのびる弥生時代後期の遺構であることが判明した。この溝の南側約80mの地点で確認調査（92次調査）を行っているが、南北方向にのびる溝が検出されている。92次地点で溝は途切れているが、位置関係からみて同一の遺構である可能性が高い。南北方向の溝の機能は不明であるが、伊勢遺跡中心部の大型建物群の軸線と一致することから、区画溝の可能性はある。SD-1で確認された集石遺構についても、性格や機能は不明であり、今後の類例の増加を待ちたい。

## 第4章 伊勢遺跡108次調査

### 第1節 調査の経緯

平成19年度より大津財務事務所から管理委託を受けている守山市伊勢町字北東浦56番2他の土地について、伊勢遺跡の範囲及び内容確認を行うため確認調査を実施した。平成19年度に実施した（107次調査）調査地隣地で調査を行った。大津財務事務所には平成20年6月24日付けで確認調査に伴う承認申請を行い、平成20年7月10日付けで承認を受け調査を実施した。現地調査は平成20年8月29日に開始し、同9月10日に終了した。調査の経過は以下の通りである。

#### 調査日誌抄

- 8月29日（晴れ） 調査区の設定。表土掘削作業の開始。
- 9月2日（晴れ） 表土掘削を進める。遺構検出作業。
- 9月5日（曇り） 遺構確認作業。断面断ち割りを行う。
- 9月8日（曇り） 清掃作業。検出状況写真撮影。
- 9月9日（曇り） 平板測量。レベル記入。断面測量作業を行う。
- 9月10日（曇り） 調査終了。埋め戻し作業を行う。

### 第2節 検出した遺構

107次調査では東西方向に流れる旧河道の北側の状況を押さえることはできたが、その南側の川跡のラインを検出することができなかった。今回の調査では、旧河道の規模をつかみ遺構の広がりを把握することを目的に調査を行った。耕作土・床土を除去し、礫を含む黄色シルト上面で遺構検出を行った。遺構検出面は標高98.6mである。

調査の結果、調査区の北側で旧河道の肩口を確認することができた他、中世とみられる土坑・柱穴等（灰黄色砂土 7.5Y5/1）を検出した。調査地の東側では灰黄色シルトの地山が広がっており、西側では黒褐色粘質土の不定形な堆積が幅5m以上、長さ8m以上にわたり確認された。

旧河道は東西方向に伸びており、幅10m、深さ50cm以上あることが確認された。この調査地点の西側で調査を行っているが（64次調査）、幅13～15mの旧河道が検出されており、下流域に向かって幅広くなっていることが想定された。旧河道の堆積状況を確認するため、トレンチ北西側で断割り調査をおこなった。その結果、こぶし大の円礫を含む黄褐色～灰褐色砂礫層の堆積がみられた。この旧河道の肩口で、旧河道に切られた状態で落ち込みSX-1を検出した。幅2.3m、深さ90cmを測る落ち込みで、黒褐色粘質土の堆積が認められた。遺物等は出土しなかった。平面検出ではその形状が明確におさえられなかった。旧河道の南肩に沿った弥生時代後期の大溝の延長部である可能性も残ることから、調査区南東壁で断割り調査を行ったが、大溝とみられる遺構は確認されなかった。SX-1は土坑状の落ち込みとも見られるが、黒褐色粘質土の下層に南北方向に伸びる溝が存在する可能性も残る。

### 第3節 出土遺物

平面検出の際、旧河道の上面で1～7の遺物が出土した。旧河道に含まれる遺物で時代も多様である。1は、くの字状に外反する口縁部をもつ甕である。古式土師器とみられる。2は外面に叩き目を残す甕の肩部で、古墳時代初頭の古式土師器とみられる。3は受口状口縁部の第1口縁部とみられ、第2口縁部の立ち上がり部は欠損している。やや粗雑なつくりで、古墳時代前期の所産とみられる。4は有段口縁の高杯とみられ、シャープな稜線からみて弥生時代後期の遺物とみられる。5は土師皿、6は須恵器の坏とみられ、奈良末～平安時代の遺物と考えられる。7は黒色碗で13世紀（鎌倉時代）の遺物である。旧河道上面の遺物群であり、古代末から中世にかけての遺物が含まれていた。

### 第4節 まとめ

今回の調査では、107次調査の成果と合わせ、旧河道の規模が概ね把握することができた。しかし、旧河道の南肩に沿って伸びると予想された弧状の大溝の延長部を確認することはできなかった。

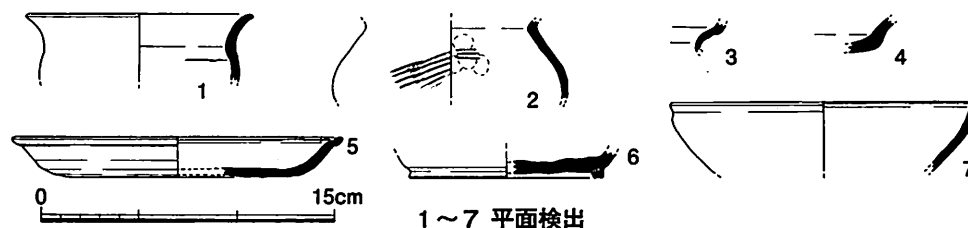
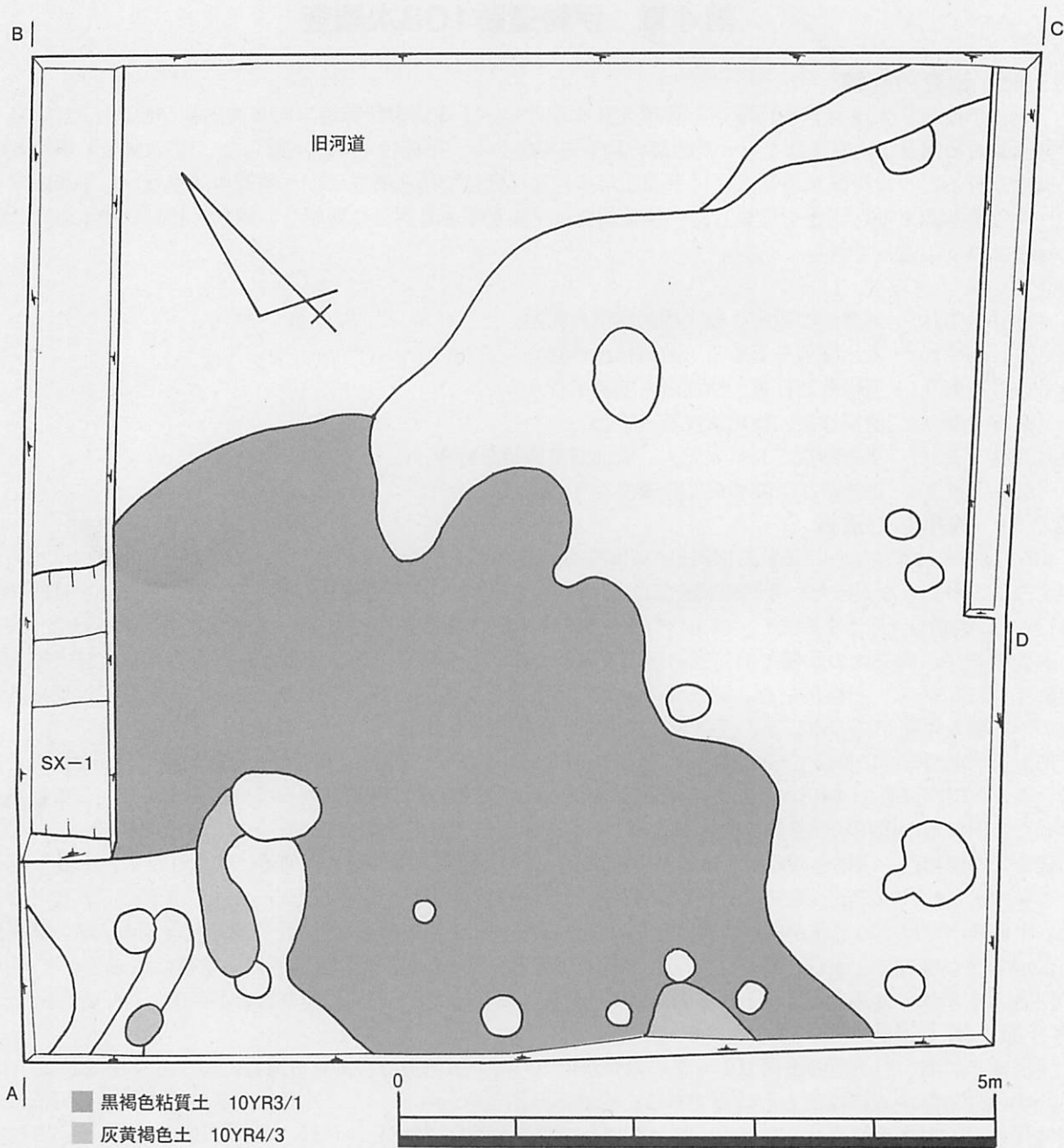


図14 伊勢遺跡108次調査出土遺物実測図



伊勢遺跡108次調査平面図

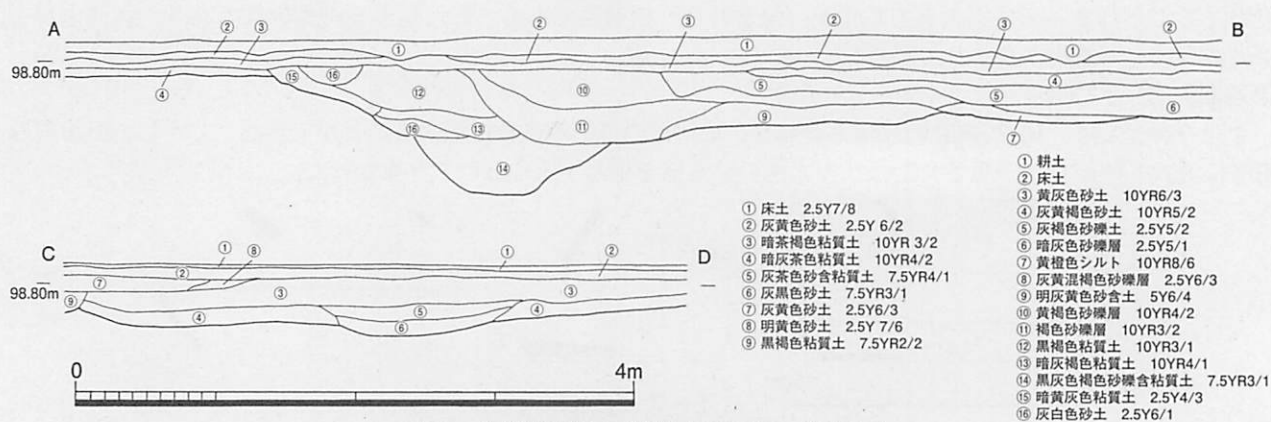


図15 伊勢遺跡108次調査平面図・断面図

## 第5章 伊勢遺跡109次調査

### 第1節 調査の経緯

平成19年度より大津財務事務所から管理委託を受けている守山市伊勢町字北東浦56番2他の土地について、伊勢遺跡の範囲及び内容確認を行うため確認調査を実施した。平成21年度は、伊勢遺跡大洲地区から弧状に延びる溝の延長部の位置を確定する目的で、確認調査を行った。大津財務事務所には平成21年8月5日付けで確認調査に伴う承認申請を行い、平成21年8月11日付けで承認を受け、調査を実施した。現地調査は平成21年8月27日に開始し、同9月18日に終了した。調査の経過は以下の通りである。

調査日誌抄

8月27日（曇り） 調査区の設定。道具の搬入。

9月1日（曇り） 表土掘削開始。

9月2日（晴れ） 遺構検出作業を進める。

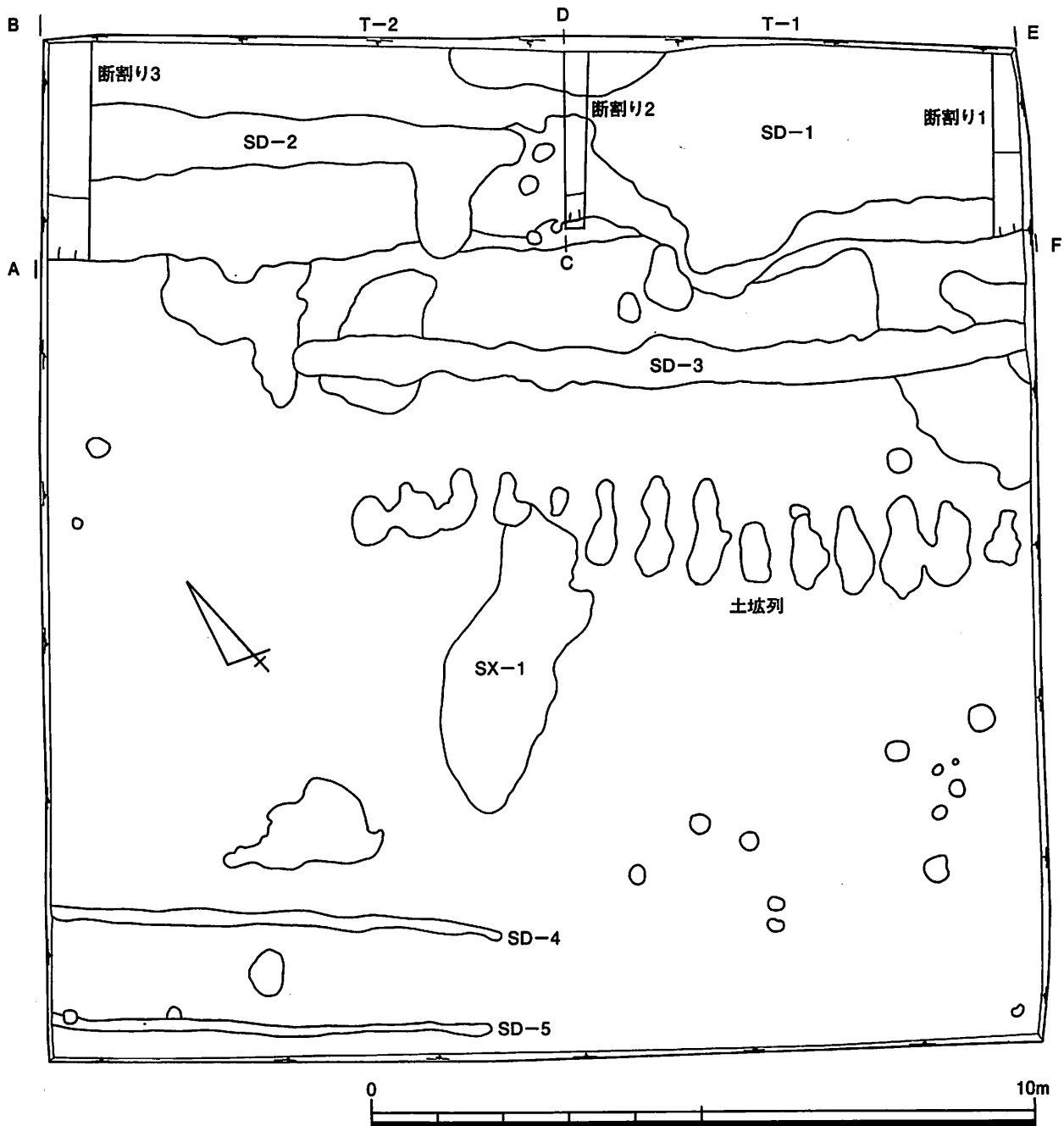


図16 伊勢遺跡109次調査全体図



9月3日(曇り) 大溝を検出。溝断面の断ち割り作業を行う。  
 9月4日(晴れ) 断面測量作業を行う。平板測量・レベル記入。  
 9月8日(曇り) 埋め戻し作業を進める。  
 9月9日(晴れ) T-2の表土掘削作業を進める。  
 9月10日(晴れ) 平面清掃作業。検出状況写真撮影を行う。  
 9月11日(晴れ) 平板測量。大溝断面の断ち割り。断面測量作業。  
 9月16日(曇り) 掘削部分に山砂を搬入。埋め戻し作業を進める。  
 9月18日(晴れ) 撤去作業。現地調査を終了する。

## 第2節 検出した遺構

平成16年度に阿村町字下大洲168・170番で実施した96次調査では、幅約3m・深さ約1mを測る大溝が弧状に北西方向に延びることが判明した。この大溝は弥生時代後期末には埋まりはじめ、中・上層からは庄内式から布留式古段階に並行する土器が出土しており、古墳時代にもその機能を維持していた可能性が高いと考えられた。大洲地区で検出された幅7m・深さ2.1mを測る大溝でも、最下層では弥生時代後期末に埋まりはじめ、中層では庄内並行期、中・上層では布留式古段階の遺物が出土しており、溝が再掘削され維持されていたことが確認されており、伊勢遺跡の衰退過程を考えるうえでも重要な位置を占めていると考えられた。今回の調査地点では、阿村町96次地点から延びる大溝が検出されるものと期待された。

調査の結果、大溝SD-1が検出されたほか、中世とみられる柱穴、溝、土坑列などが検出された。SD-1は調査区の北東側でその一部が検出されたもので、南東から北西方向にやや弧を描きながらのびていることが

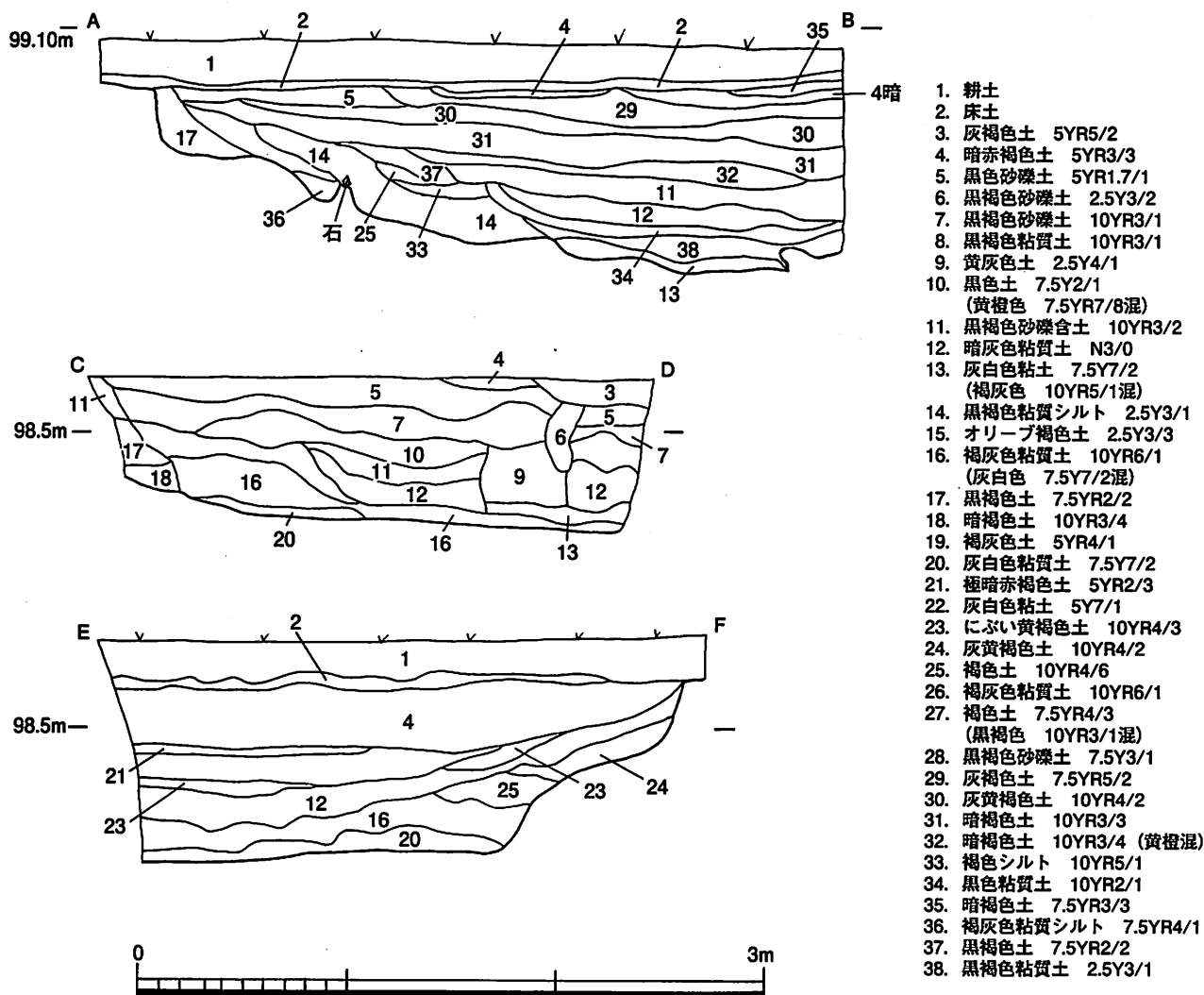


図17 伊勢遺跡109次調査SD-1断面図

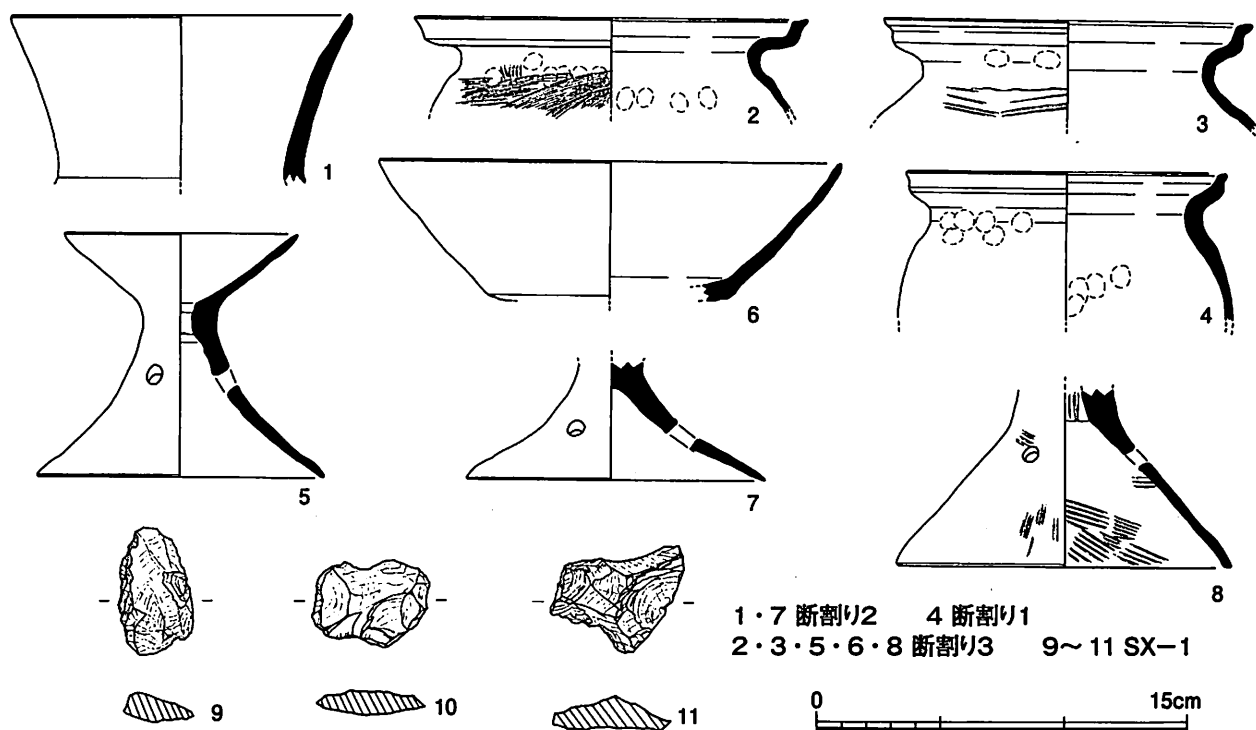


図18 伊勢遺跡109次調査出土遺物実測図

判明した。幅3.5m以上、深さ1mを測り、逆台形の断面形を呈す溝である。中・上層には砂礫を含む黒褐色～黒色粘質土の堆積がみられた。下層には地山に近い灰褐色粘質土の堆積がみられ、短期間に埋没した様子がうかがわれた。溝の肩口から下層にかけて、黒褐色～褐色シルトの堆積がみられ、A-B断面の断ち割りを行った際、土器がややまとまった状態で出土している。土器が出土した土層は最下層とはいえないものの、大溝がほぼ埋まりはじめた年代を示すものとみてよい。

SD-2・SD-3は灰白色砂土（小礫を含む）が堆積した幅50cm～1mを測る溝である。ごく浅い溝で、SD-2は南東端が途切れ、SD-3は北西端が途切れている。SD-4・5は幅20cmほどの小溝で、1.8m幅で並行して検出された。明灰褐色粘土の堆積がみられ、中世と考えられる灰白色の柱穴を切り且つ、切られていることからほぼ同時代の遺構と思われる。

調査区中央では、幅30～50cm、長さ1～1.8mを測る土坑が14基、列状に並んで検出された。灰白色砂土の堆積がみられ、耕作にかかる遺構とみられる。このような遺構は伊勢遺跡4次調査でも検出されており、古墳時代後期から古代にかけての遺構と推測される。調査区南隅では10数個の柱穴が検出されているが、いずれも明灰白色砂土の堆積土で、大洲地区に広がっている鎌倉時代の掘立柱建物の一部とみられる。調査区中央では幅2m、長さ5mを測る不定形の土坑SX-1を検出している。淡黒褐色粘質土の堆積がみられ、炭が若干混じっていた。平面検出時、サヌカイトの剝片が3点出土しており、縄文時代に遡る遺構と考えられる。

大溝の周辺には弥生時代後期から古墳時代前期と推定される遺構は皆無で、遺構密度は極めて低いことが想定された。

### 第3節 出土遺物

大溝からは1から8の土器が出土した。1は断割り2の下層より出土した壺型土器で、外上方に伸びる口頸部が特徴で、端部は尖頭状に収められている。弥生後期末から古墳時代初頭の遺物とみられる。7も断割り2の肩部下層の黄色ブロック土とともに出土した高杯脚部で、1とともに埋没年代を示す遺物とみられる。絞られた脚中部より大きく開脚する裾部をもち、低脚を特徴とする。3方透かしで、弥生時代後期末から古墳時代初頭の所産とみられる。断割り3からは2・3・5・6・8の土器が出土した。溝の肩部から中・下層へ堆積する黄～褐色粘質土よりまとまって出土した遺物である。土層観察からするとやや浮いた状態で出土したものであるが、大溝が完全に埋まりはじめた年代を示す資料と思われる。2・3は受口状口縁甕である。2は上端部を外方に大きくつまみ出し、肩部には斜め刷毛が施されている。3も端部を外方へつまみ出したもので、肩部にはX状の粗い

刷毛が施されている。いずれも無文であり庄内式新段階から布留式古段階に並行する時期の特徴を示している。5は小型の器台で、浅い坏部からハの字状に開脚する脚部が付く。6は深い坏部をもつ高杯で、口縁部はやや内湾し口縁部端に至る。庄内式新段階に近江南部地域でも一般化する器種である。8は高杯の脚部で、絞られた脚中部からハの字状に開脚する裾部が付く。裾部は内湾気味に開脚するもので、内面に粗い刷毛が施されている。4は断割り1の肩部に堆積する黄色ブロックより出土した受口状口縁甕である。屈曲にシャープさが無く、端部がやや丸みをもってつまみ出している。無文であり、庄内式新段階から布留式並行期の特徴を示している。9～11は平面検出時にSX-1より出土したサヌカイト剥片である。調査地周辺では縄文時代後期初頭(北白川上層式)の石囲炉や土器・石器が出土しており、縄文時代後期の遺構が存在するものとみられる。

#### 第4節 まとめ

今回の調査では、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて埋没したとみられる大溝が検出された。これは、阿村町字下大洲96次地点から北西に伸びると大溝の延長にあたることが想定される。96次地点では幅3mであったが、今回の調査では幅3.5m以上あることから、96次地点では標高が高いため、削平されていたことが予想される。

出土土器からすると、最下層に近い土器は弥生時代後期末から古墳時代初頭と想定され、やや古い傾向がみられた。しかし、まとまって出土した下層に近い一群の土器は、庄内新段階から布留古段階に並行する新しい土器群であった。大溝がこの年代まで機能を維持していた可能性があるともみられる。伊勢遺跡では大型建物群が廃絶した後、庄内から布留式並行期の竪穴住居が営まれており、遺跡西側にあたる大苗代地区ではその時期の方形周溝墓群が見つかっている。このことは、伊勢遺跡が弥生時代後期末に完全に廃絶するのではなく、規模を縮小しながらも古墳時代前期にかけて遺跡が営まれていたことが想定される。ただ、遺跡そのものの性格は大きく変化していると考えられ、集落に対応して墓群が営まれていることから一般集落化しているものとみられる。

## 第6章 調査成果のまとめ

本書では、平成19年から平成21年にかけて、伊勢遺跡で行った確認調査の成果について報告した。特に、財務省大津財務事務所が所管する伊勢町字北東浦56番2他で、未調査部分について集中して確認調査を実施した。その結果、新たな事実関係が確認されたが、今後の課題も明らかになった。最後に確認調査の成果を列挙するとともに、今後の課題を明らかにし、まとめとしたい。

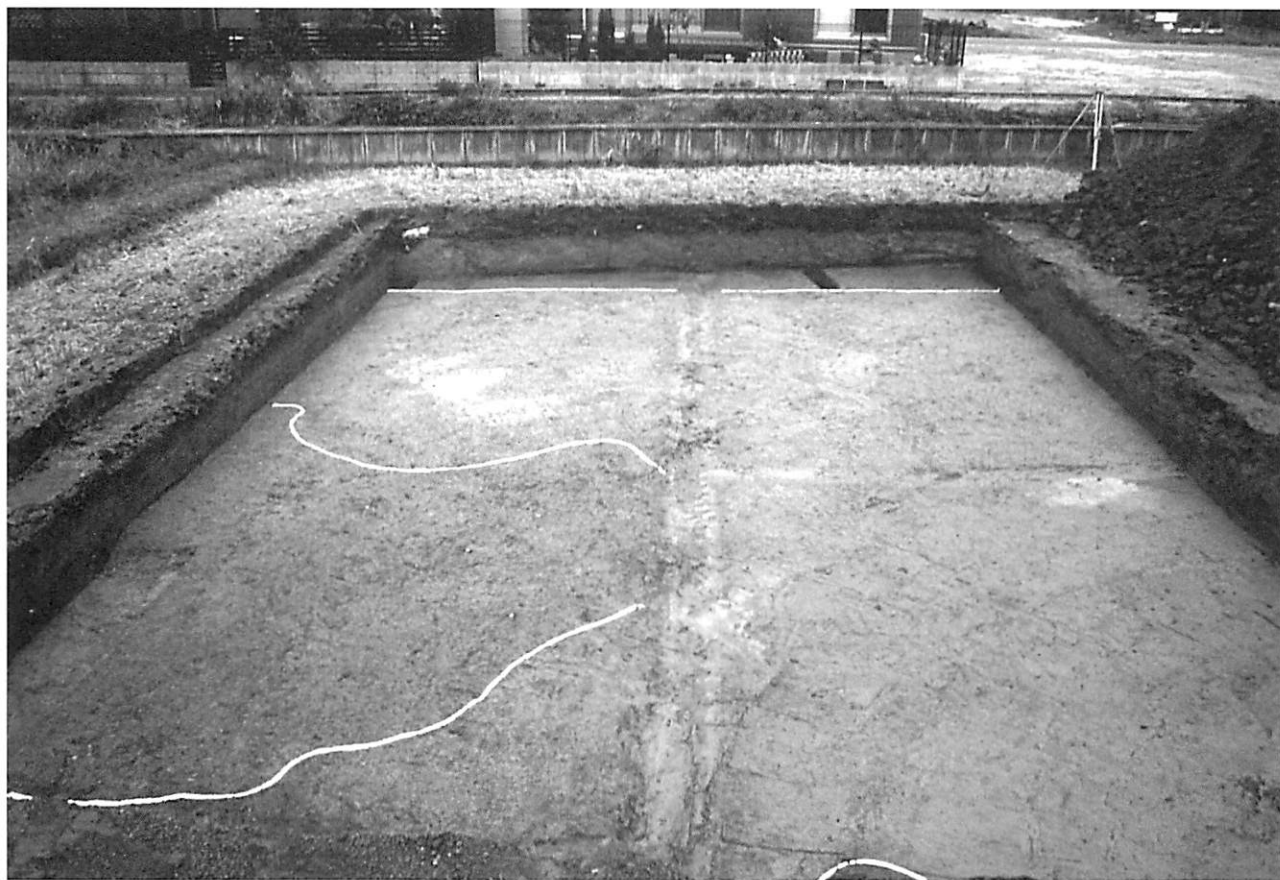
106次調査では、遺構密度が希薄で、低湿地化している状況が確認された。現井上川に沿って溝SD-1が確認されたが、土地区画整理に伴う調査でも奈良時代～鎌倉時代にかけての溝が多数検出されており、今回検出された溝もその一つと考えられる。弥生時代後期の遺構はまったく見られなかった。

107次調査では旧河道・溝・土坑等が検出された。調査前の予想では、阿村町側から弧状に伸びる大溝が旧河道肩口で確認されるものと想定されたが、旧河道の断割りでは砂礫層が厚く堆積しており、大溝を検出することができなかった。旧河道の北側でも大溝が確認されなかったことから、旧河道に切られている可能性が高い。旧河道の北側から弥生時代後期と見られる遺構が検出されたことから、伊勢遺跡にかかわる遺構がさらに北側に広がることが予想され、今後の課題である。今回の調査では、弥生時代後期の南北方向に伸びる溝が新たに検出された。同調査地点から80m南側で南北方向の溝を検出(92次調査)しているが、同溝の延長とすると大型建物群と同じ方位をもつ区画溝の可能性が高い。溝及び溝底の集石遺構の性格については不明であり、今後の課題である。

108次調査では、旧河道の南側の肩部のラインが確認された。しかし、阿村町側から伸びる弧状の大溝は検出されなかった。これとは別に溝状の落ち込みが検出されたが、その性格や広がりについては今後の課題として残った。

109次調査では大溝が予想どおり確認された。位置関係からみて阿村町側から伸びる大溝と考えられる。出土遺物からみて、弥生時代後期末から埋まりはじめるものの、古墳時代初頭の遺物が下層近くで出土したことから、古墳時代に入っても大溝として維持されていた可能性が高い。伊勢遺跡の衰退過程を考える上で、重要な資料となった。

伊勢遺跡の広がりを考える上で、今回の調査では弥生時代後期の遺構がより北側へ広がっていることが確認された。これより北側には水田がひろがっており、伊勢遺跡の範囲確認調査の課題となる。



調査地全景（南東から）



調査地全景（東から）





T-1 全景 (東から)



T-1 全景 (南東から)



T-1・T-2全景（北西から）



SX-1全景（北から）



SD-1 全景（北から）



SD-1集石出土状況（北から）





108次調査全景（東から）



108次調査全景（西から）





108次調査全景（南東から）



108次調査断割り（東から）

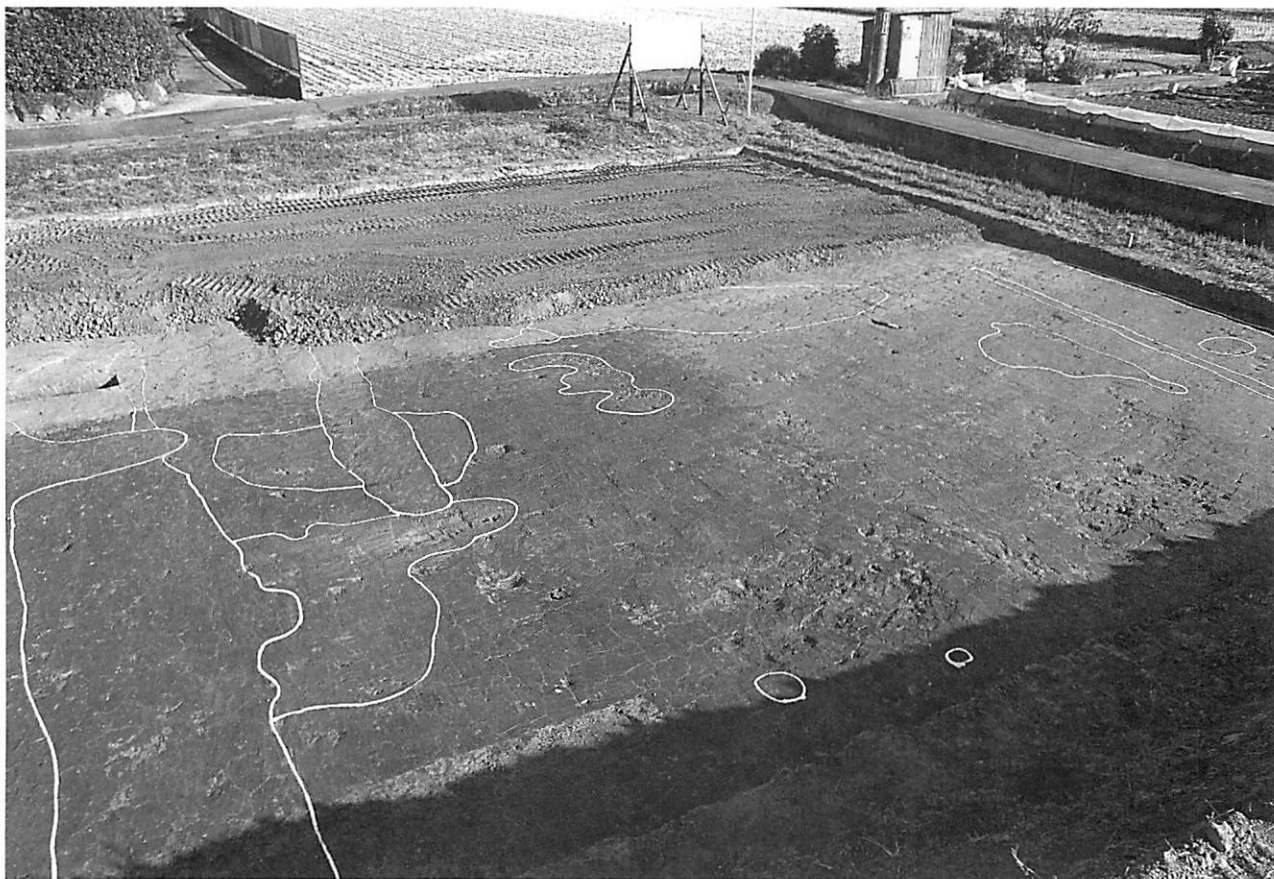


109次調査T-1 全景（南西から）



109次調査T-1 全景（南から）

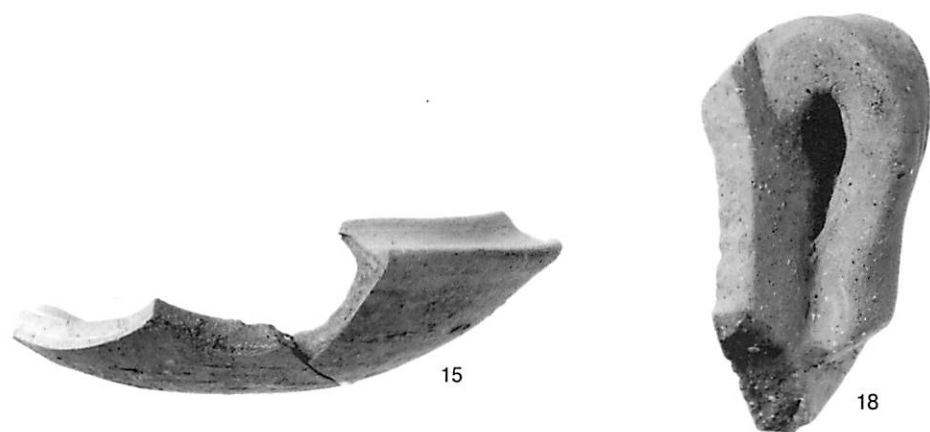
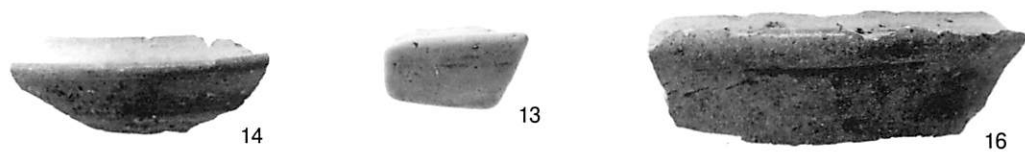
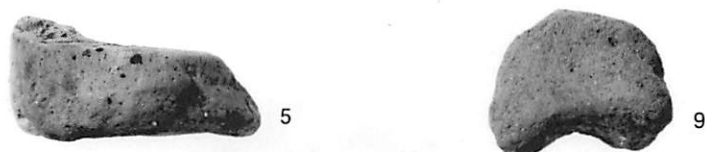
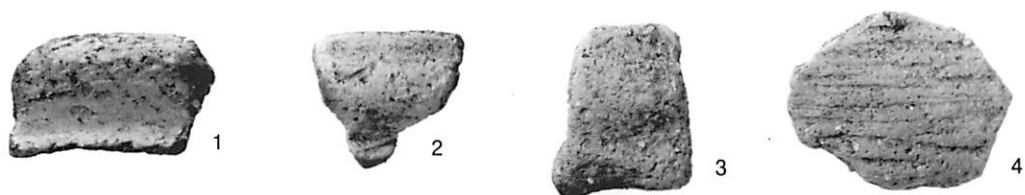




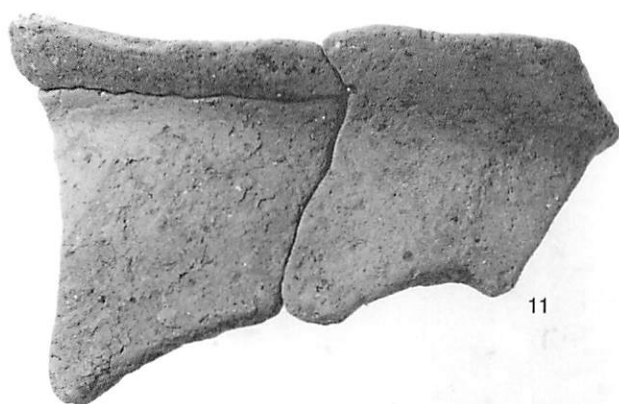
109次調査T-2全景（西から）



109次調査T-2全景（南東から）







11



17



12



19



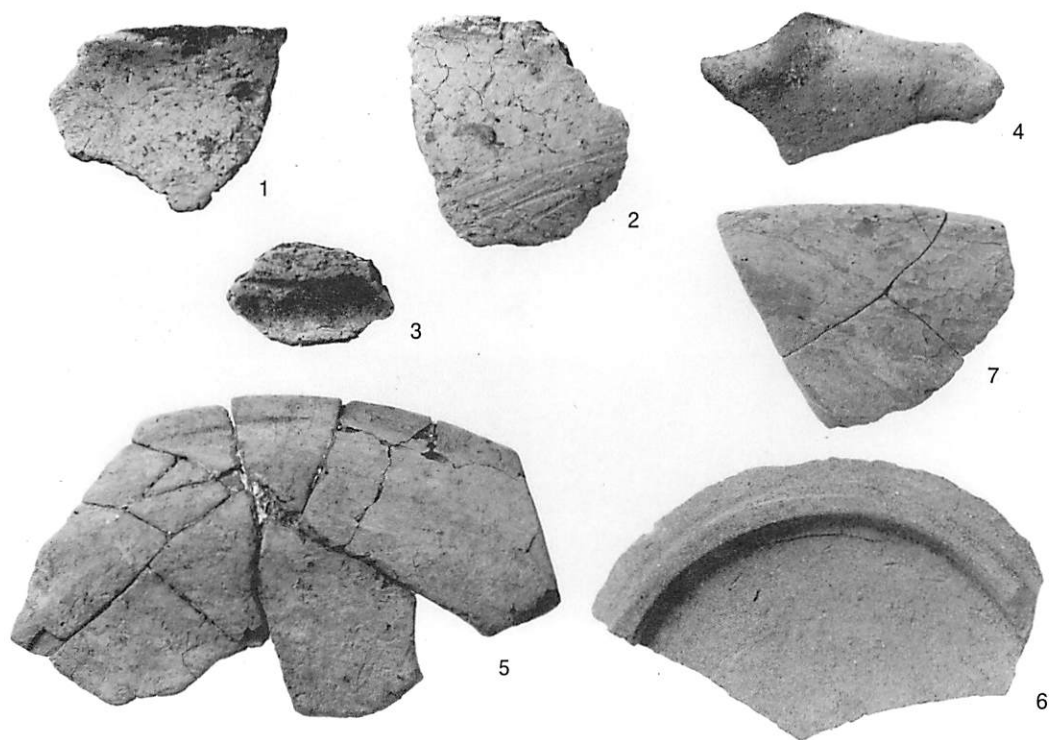
22



21



20



108次調査出土遺物



109次調査出土遺物



# 報 告 書 抄 録

| ふりがな          | いせいせきかくにんちょうさほうこくしょⅧ       |                           |      |             |           |                          |           |      |
|---------------|----------------------------|---------------------------|------|-------------|-----------|--------------------------|-----------|------|
| 書 名           | 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅷ               |                           |      |             |           |                          |           |      |
| 編 集 者 名       | 守山市教育委員会 教育長 上路 博          |                           |      |             |           |                          |           |      |
| 編 集 機 関       | 守山市教育委員会                   |                           |      |             |           |                          |           |      |
| 所 在 地         | 〒524-8585 滋賀県守山市吉身二丁目5番22号 |                           |      |             |           |                          |           |      |
| 発行年月日         | 西暦 2013年3月31日              |                           |      |             |           |                          |           |      |
| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所 在 地              | コード                       |      | 北 緯         | 東 経       | 調査期間                     | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|               |                            | 市町村                       | 遺跡番号 | 〃 〃         | 〃 〃       |                          |           |      |
| 伊 勢 遺 跡       | 守山市伊勢町                     | 207                       | 045  | 35 03 23    | 135 57 44 | 平成19年11月<br>～<br>平成21年9月 | 1,000㎡    | 確認調査 |
| 所収遺跡名         | 種 別                        | 主な時代                      |      | 主な遺構        |           | 主な遺物                     |           | 特記事項 |
| 伊 勢 遺 跡       | 集 落                        | 縄文、弥生、<br>古墳、奈良、<br>平安、中世 |      | 旧河道、柱穴、土坑、溝 |           | 弥生土器、土師器、<br>須恵器         |           |      |



## **伊勢遺跡確認調査報告書Ⅷ**

守山市文化財調査報告書

発 行 日 平成25年(2013) 3 月31日

編集・発行 守 山 市 教 育 委 員 会

滋賀県守山市吉身二丁目 5 番22号

印 刷 アインズ株式会社